

大和名所圖會

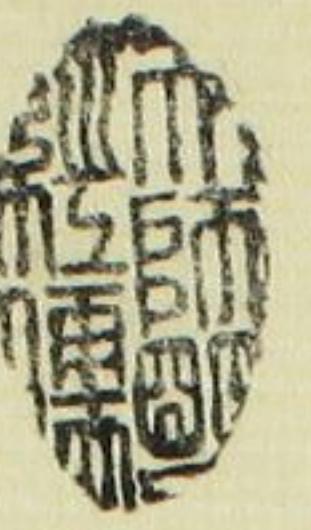
漆上郡

二

1 2 3 4 5
6 7 8 9 10
11 12 13 14 15
16 17 18 19 20
21 22 23 24 25
26 27 28 29 30
31 32 33 34 35
36 37 38 39 40
41 42 43 44 45
46 47 48 49 50
51 52 53 54 55
56 57 58 59 60
61 62 63 64 65
66 67 68 69 70
71 72 73 74 75
76 77 78 79 80
81 82 83 84 85
86 87 88 89 90
91 92 93 94 95
96 97 98 99 100

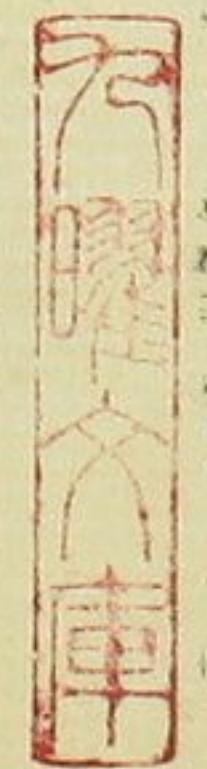
所有者	格價	購得年月	部類
		一〇	四九二

七五



安國の大和内國志

神武帝のまゝり都をたゞさ
せぬべくと時代の折とあれる
ゆえふほほくは規模よろひ
成のほう功めをこの世氣質今



かあまはるあうてゆりと申
手紙をひく書時宮渡の所
わあらんに人傳よ地畫うへ裏
秋風湘タる老朽りてあ和古跡
故家是信流傳すとく風すく
あつまう事てひづく画よう教

またふあくか記して焉平毫々
一太和國令と名成くたふ又
事の因をよろこもあむれ
るんや實よ多處の好士を
ておとがれをゆふ志世一(梓小
えのほ正木内おほあがく

近たる所、松の葉のさまで
伏原氏在よおこひかそれへゆき
そくひねつあとふくら

寛政奉文集

伏原正三位清原宣條卿

御系図



大和名所圖會卷之一

添上郡南都之部目錄

大和國號之解

奈良之訣

南都之溫觴

春日野

春日社

中院小社六座

南都之溫觴

聖の床

一位橋

鹿走

直會殿

御手洗川

遷殿

二位橋

影向石

如意石

布生橋

南門

鳥居

俊喜櫻

春日若宮

酒殿

御供所

懸橋

紀伊宿

居石

外院小社

佐良泉

五箇屋

西造

聖の床

本淡義

波打之屋

内院小社

如意石

安居屋

竹之屋

經藏

鉢の置

水屋社

牛石

長尾祠

日月盤氷空舊蹟

春日山

大鳥居

若宮御旅所

君消澤

車屋殿

五位橋

名燈爐

本宮嵩

借香山

忠隆金剛童子

外院小社八座

本宮嵩

高嶽

尾上宮

宅玄日

羽賓山

東大寺大佛殿

名銅燈爐

若校井

法華堂

宜寸川

良辨杉

勅封倉

如月瀧

鎮守幡官

念佛堂

鈔墳

戒壇院

野守境

講堂の躰

蝙蝠窟

如月瀧

東南院

大紅塵

守境

詫宣池

景清門

戒壇院

五百立祠

北向荒神

文遣地藏

玄武山

冰室祠

北向荒神

五百立祠

飛火跡

飯盛山

文遣地藏

八幡池

鏡池

北向山

空海寺

鏡池

二月堂

二月堂

四月堂

若艸山

後奈堂

一月堂

高圓山

白毫寺

鳴雷神

鰐翁杖跡

後奈堂

二月堂

着到殿

他獄谷

僧正門

率川

拔戸祠

慶賀門

馬出橋

善趣橋

二基塔

名燈爐

水互川

二笠山

春日糸圖

御祭圖

二笠山

凡例

一域内十五郡小封境小大あり度大取る一郡二卷小直で校ひる所
五郡一巻小縛るわり其郡界へ圓卦の上小細書して標し

一圖中一小大度の寺院等を創り一子有餘菴と庵との多々時葉後変
隨ひ國郡騒擾の時或へ荒廢し或へ圓祿小乃くも亦々一於是
圖画へ今時の京勝がわべて由縁へ舊記がとてよく書く所謂
興福寺薬師寺のまほせんあきとあり

一圖畫の間くふ人の大繪あり古あるのこころと画もろそ其跡の風を今
あくさんうなじ又事實が画もろそを蒙乃見姿うん便やあ

来日此は緋松かどあれ入

一新建の堂舎新建の碑縞の款をとふ漏一作が考雅風流
あるものが名々んで載る

邈矣鴻靈地千
年芳艸新風
煙岫勝景長此
引駢人 大江貞衡

公事根源曰

今の國極の美

秋がうるし笛を吹

うそとて吉野より年の

始まりありとて

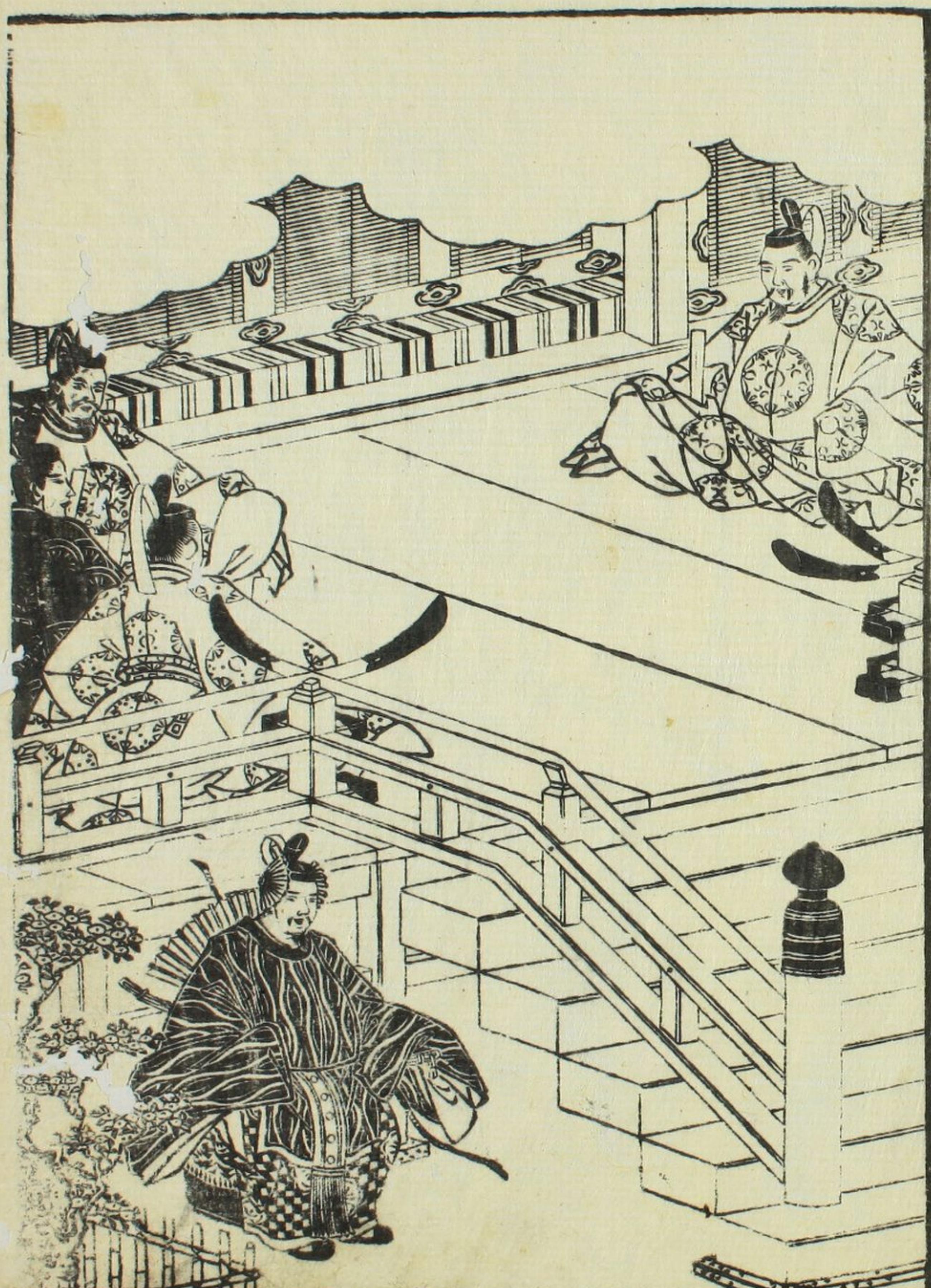
かへ

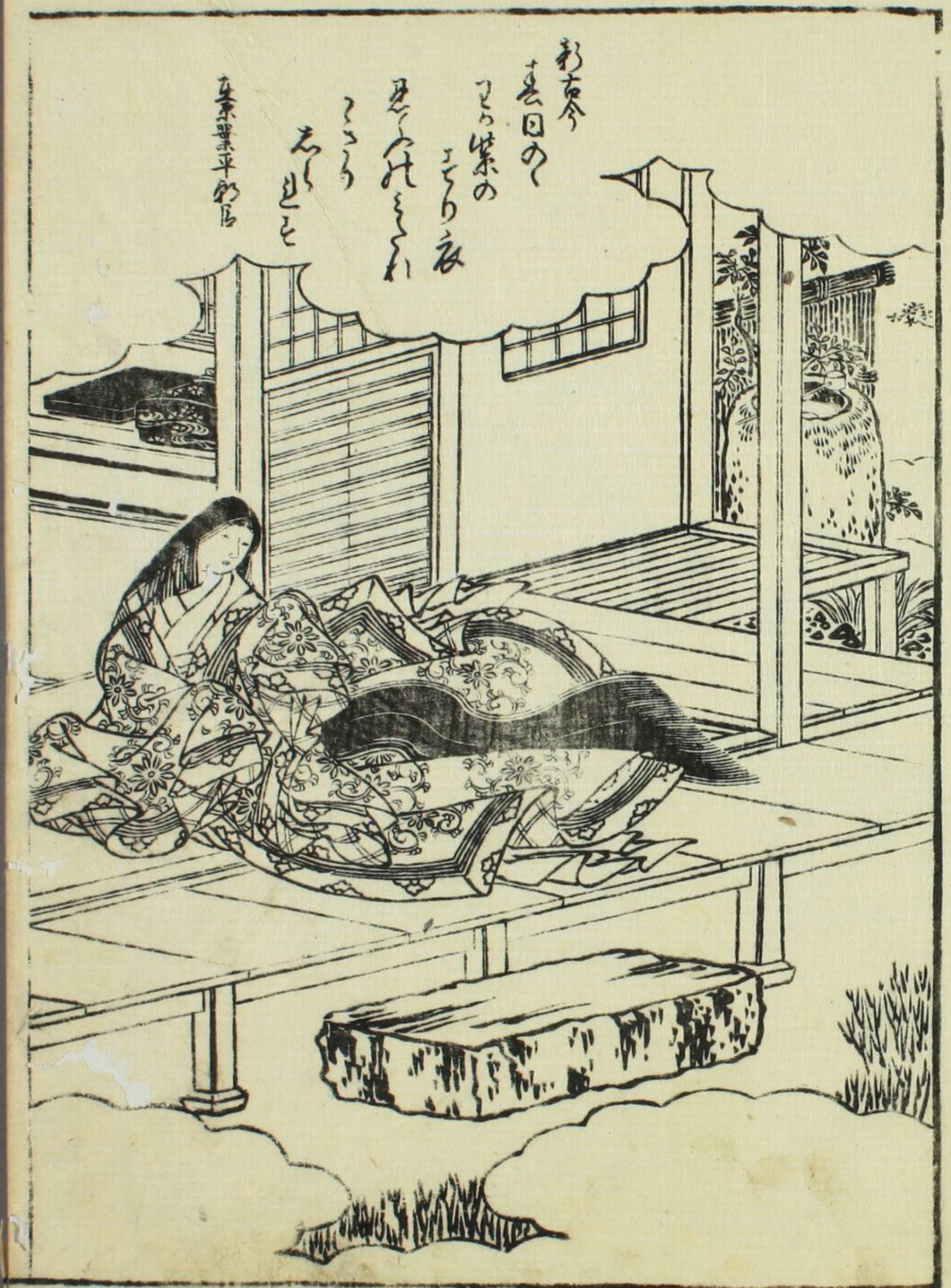
江家次第曰

國極歌笛於ニテ

義明門外

奏之





大江坂

まよち

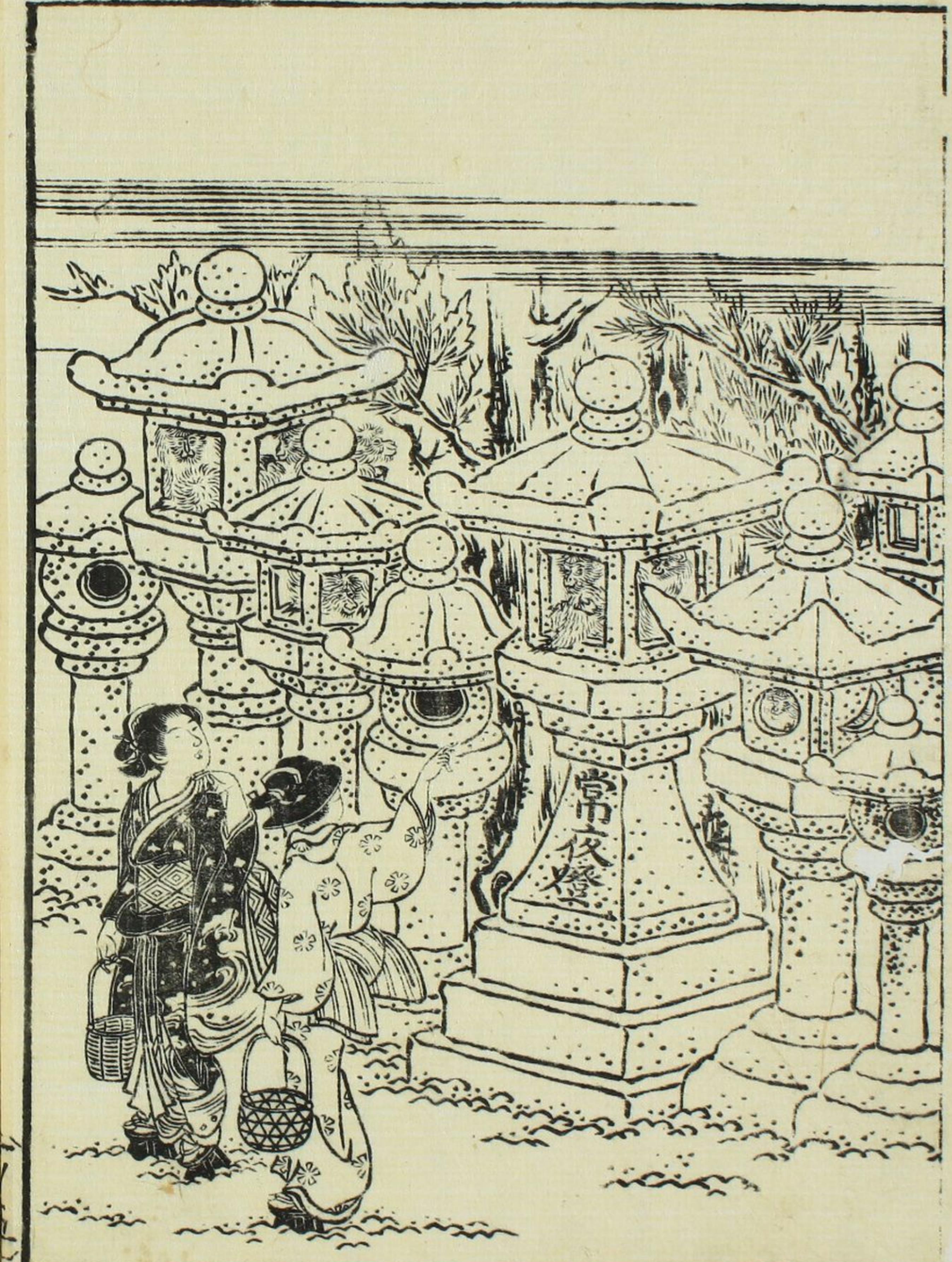


千里楓林烟樹深
無朝無暮有猿吟



大和國と號する日本書紀神代卷曰大日本豐八津洲
肇神武天皇天下王也逮て神代の蹤が施日向國宮崎小都
此は天子草昧小一て封域も定らば帝東征ゆして後初く邪
大和國権原宮小定やしと國造小珍彦と居り故尔大和國も
日本の惣號よりて皇居が宮移入國うれを通称へ一國の名とせり
續日本紀曰聖武帝天平九年大倭國改て大養德國同十九年又
改て舊小倭大倭國拾芥抄曰天平勝寶年中改て大和國
倭國草昧の小居舍有人民唯小據て窩と是よりて
山戶釋日本紀曰開闢の始土也濕氣乾燥之諸谷登乎人の跡也
人到彼土稱大倭故如此書乎云日本世記曰釋道東朝
連綿也トウ或ヘ本朝行書一て異朝シテ小從ひ或ヘ異域前よ而て城
朝後小和モ日本釋名曰萬信神武帝日向より東征行之にサ行

難波より牧方少のびせたまひ其より伊駒いこまが起て大和入野と膳駒との外
小ある國より故少外とて淀の内いなある國うれじの内とあづけと外とて
の内いな小對こゑとの名うりべつ又伊駒の背せにある北の國きたと背國せくと
一へ替かえうり續日本後紀曰承和三年十月己未承前之例畿内國次以
大和國處之第一勅てつ置おき新式改之以ひ城國處之第二云日本正統圖曰大和
國大管十五郡山繞而種生十倍出國之差圖さしお名所舊跡敷系大上上國也
奈良なら條上郡あり日本紀曰崇神天皇土年武埴安彦と妻の五田媛ごだひめと
國家こくわ頗やうん傾かたむくと背國せくより拵こしらせるある官軍那羅ならと小屯聚こしゆうして草くさあらふ躡
距き一いつよりそのそ號ごうく那羅ならとしと輪韓りんかんのの被かぶくに桃ももみ歎かな人
財ざいののそのの公こう桃もものの建立たての時木津きづののもも朝敵あさけの軍數ぐんすうとく武埴
安彦あらひ夫婦ふめが官軍くわんぐんやももと討取うそくる爰あ小忌こひとと門もんと和珥わじの武錄坂ぶろく乃
上に鎮坐ちんざう忌こひ青せい瓷じ青せい瓷じうりうり神中じんちゆう次つぎ首くびを酒器しゅきありあり詞林採しりんさいしゆく小青瓷こせいじ
あとも冉じんをうり青幣せいひをうりうりえを奈なの枕詞まくじ小ありありた松說まつ説ありあり通小



平城

の白王城へ文武帝の母后元明天皇和銅二年、よりて那羅の都が建つ。

那羅

諾樂寧樂同二年小遷都ありと七代の御門

元正聖武。光仁。德。孝謙

天皇良

皇居

あり桓武天皇延暦二年にと城國長岡宮小遷都一 同十三年平安城

小遷りかへた京今のお都右京へあ京がり

万葉

あとふうすの都へ嘆花のあらへくしゆこひりうす。

那羅

青丹よりうその勢を本もて化する者あれとあへぬかも

聖武天皇

拾

そくとくやめりの世にいつかもうれしかつてゆくん 人九

皇居

のゆき今のお京あは町へあへば興福寺の西超昇す郷一 東糸村のあ樹

道の翼に葉比の内といふ字の地あり今も田舎化びづけ所小内裏の宮と

よし

小祠あり

かのふきれはど 拙自平城天皇裔天子

京今

あることまく成つてあらのみやこゆもんぞくとくに嘆きり

那羅首

草木のあれれと石と人のみを形見へりけん

漢拾

よしれの名をかへ官の子祀世へたりとせうさん 法下

春日御

かのうすの春日社をとがつて春日と名づくすと作

代のじし天照大神邪神十億九千を征討げ正心小かへり

一ノ民もやまとく うらが以て天照大神の御と後悔津へ和平身一やうすのまの日れ長閑

あら御とれとまむ春日と御歡るひとその新乃里としまも日とあづけと

ス 興登產靈命の 天津兒

屋根 爽氣もじけま日本林と賜るまく春日殿と賞下へま

との下は岩根に宮も一社ゆ

の四柱の神殿壯麗小一と常祀者人

ゆくはもぐく靈驗日日に教うり

古今

春日のちやくかうて生むる事のとがつてみへー君うと 忠岑

拾

嘗て嘗つたうじま日御とくのまかねとくせんひと 忠房

朝を今

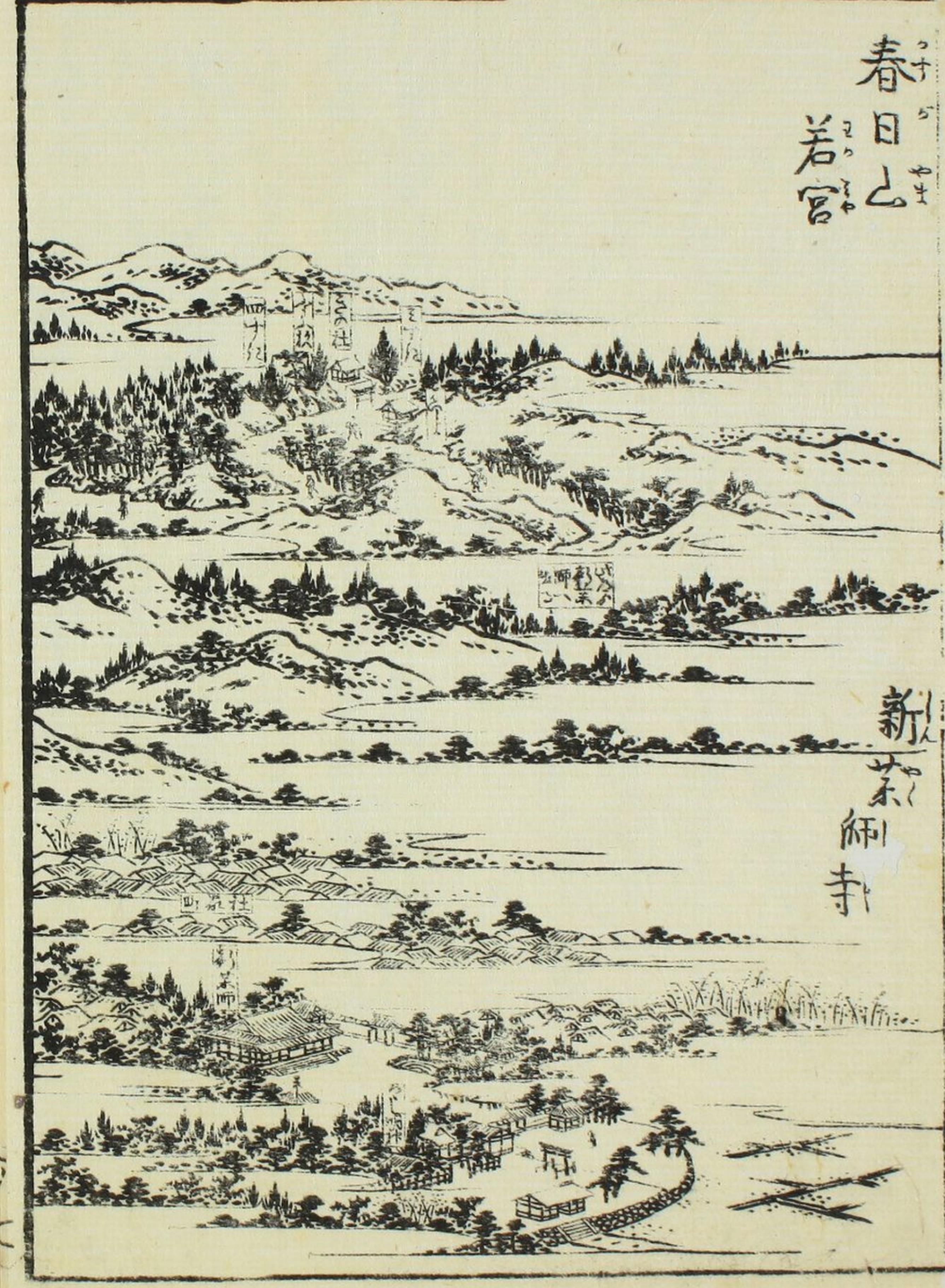
かとこのちとものなればあまく神力あらへわへせ 後成

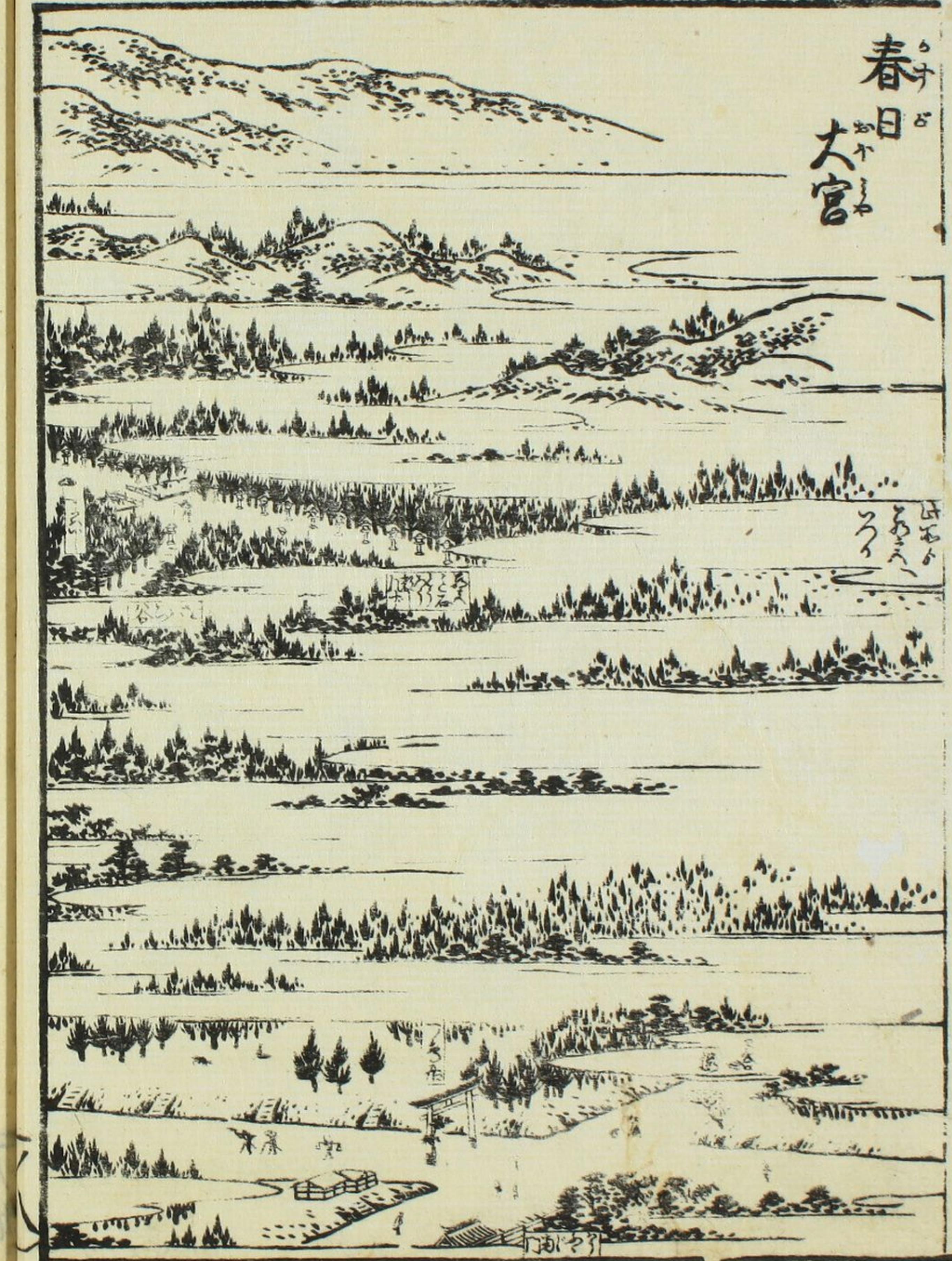
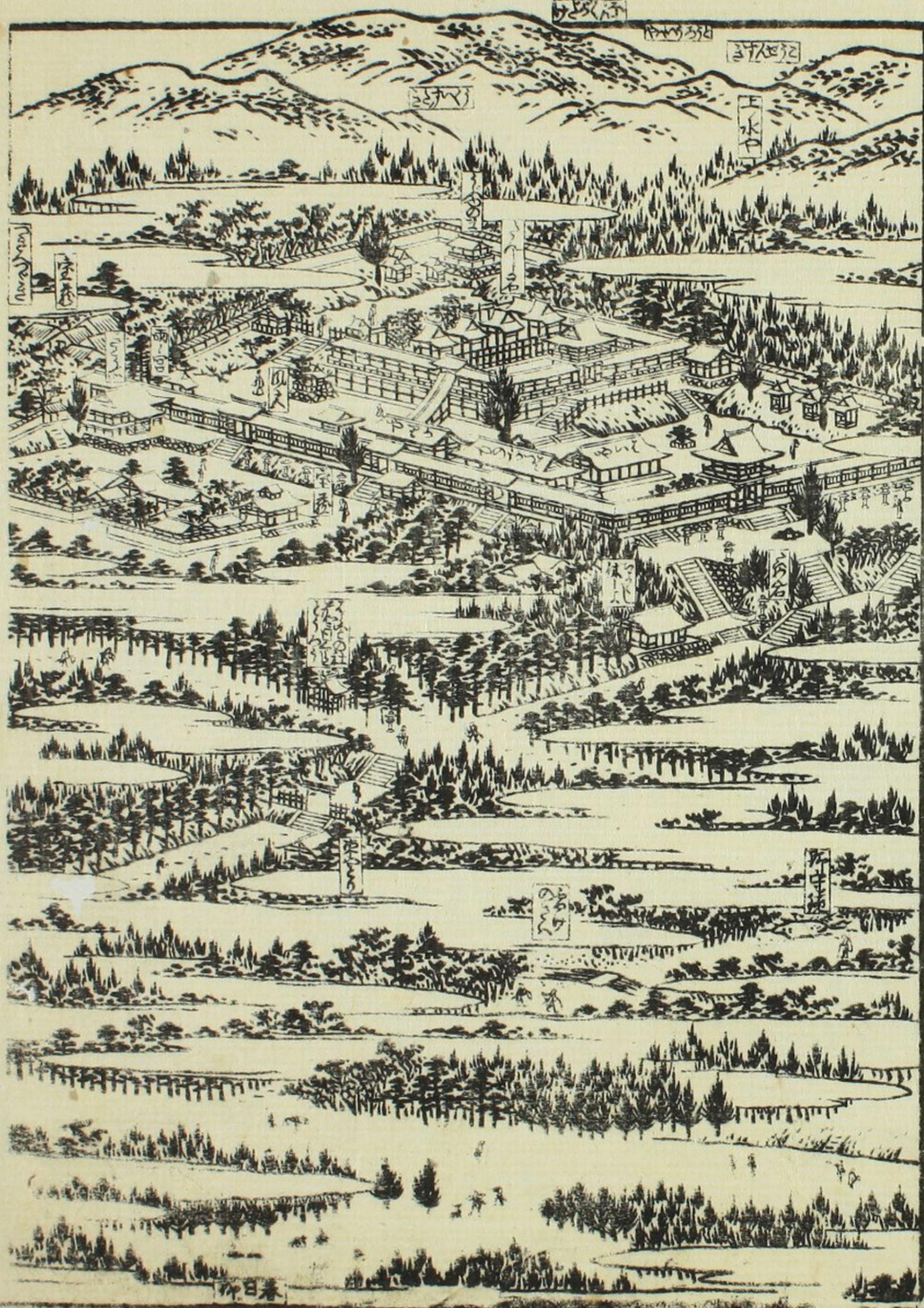
春日野原

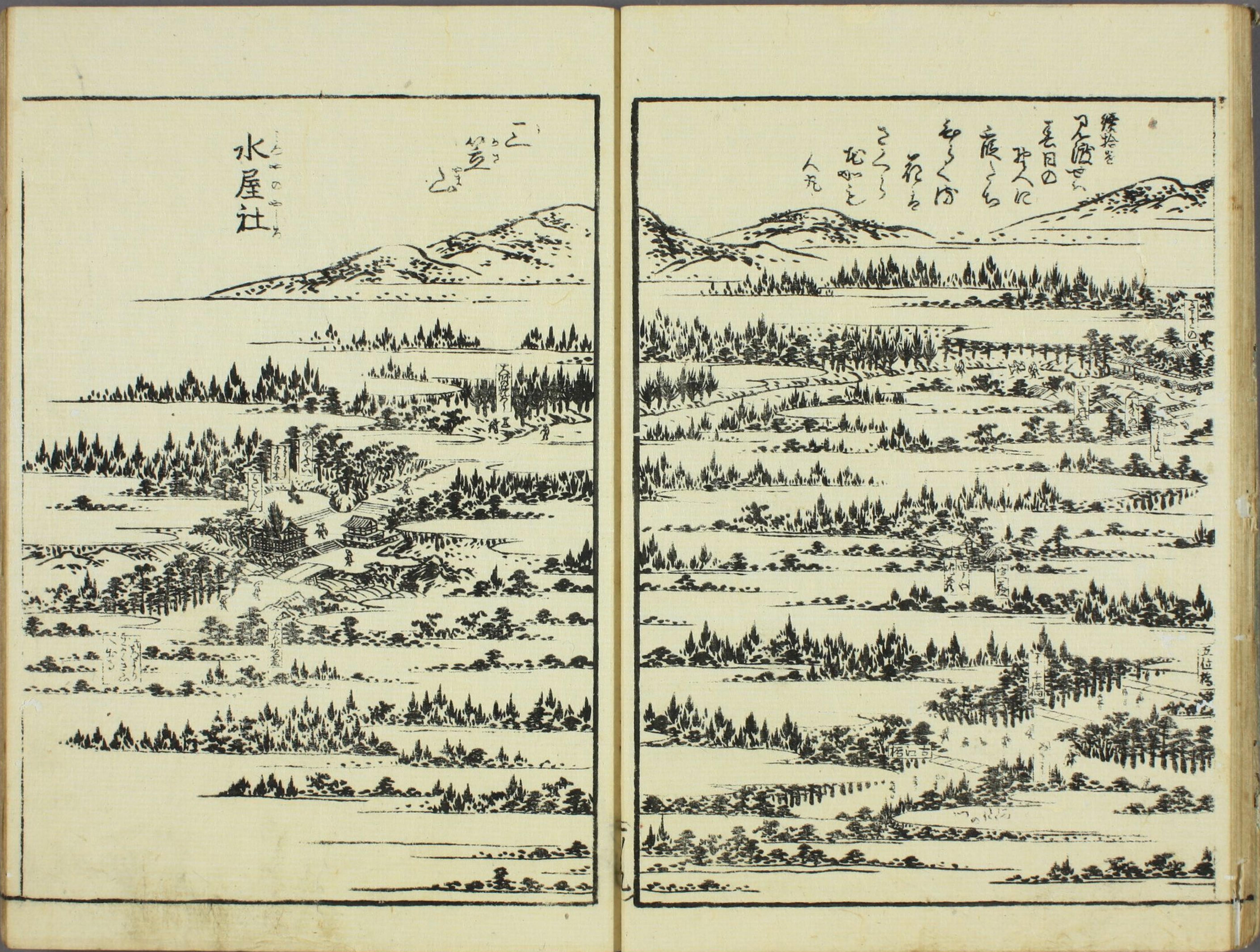
無真無聲野色妍只省麋鹿食草眠

勸修寺參議大辨經重

春日之參のあへやそくへんかとゆきにかとをかへり 中納言公勝







春日大宮四社大明神

二笠との棲木に御鎮坐り帝都より行在十一里

續古今

延喜式神名帳曰 春日祭神四座

來さと秋秋巡幸尼佛世ふいて、やうを月の世ノ熙と云ふ

子安振木代のじく、天は夷太室をトウカニ草原中國小入をいは神邪神

支(支)ノ久經津王令

番取明神武甕槌令

鹿嶋明神

追討使として國を治フ

守り子山戸と申を常園公照して、民の愁をすすメテ

天照太神 大津廻屋根令合神の御契人として御堂灌門を

せし、笠の裏面を前に示現利生の岳跡と國を康ト王法を輔ヒテナリ

社頭の自掲と二階の樓門の回廊夜燈の下に煌ヒテ四の社櫛整々

東第一の神殿へ武甕槌神を奉る御神へ伊弉諾尊火食つらひ

つるの益をもたらす初降奥國始寛浦に大浦りおひ邪杵と征一常陸國

鹿嶋小御向神護景雲九年正月廿一日麻鷺が生る也同年十二月七日薦坐の中

小名々供奉の隨身時風秀行の兩人なり時風のまゝ神官の領舍小小し御花火

番宣の組石を経其時風秀行供御と歎るふ乞とあり一秉と云ふ

下總國香取明神是より神護景雲三年に二笠の遷り春日古記。等この

神殿へ大廻屋根令中臣祖神の御名津速魂尊兒市千魂草千興登魂金

神殿へ大廻屋根令中臣祖神の御名津速魂尊兒市千魂草千興登魂金

十一月九日二笠にわが岳を、已上春日古記ノ意ヲ公事根源の説くより

五の神鏡あはれの五色の玉を處へて其の上に。第二の神殿へ經津主命御名

齊主神又齊之大人伊弉諾尊火の作がまくとく人銅の刃より走る絶血化して

うりかへ神へ出雲國五十田波の小河に大瀧は國の邪神を鎮りゆく已上日本紀

下總國香取明神是より神護景雲三年に二笠の遷り春日古記。

二神へ生れどもて二笠とに遷りゆく人已上春日社記に刀々より公事根源ノヘ神護景

斧四の神殿へ姫太神 太日靈尊もしくは御名太日靈貴ノ大瀧則伊勢國五十捨川の内宮

太日太神ト呼す人已上春日社記に大日太神の合神ノヘ又或新ノヘ

大日太神ト呼す人已上春日社記に大日太神の御君ノヘ大日屋根の御妻

是日奉承太官西新の拂林事

一年小雨なりとて二月申日

一月申日ふらりけをくわへ

仁明帝嘉祥二年七月
中宮秀基からて奉勅と

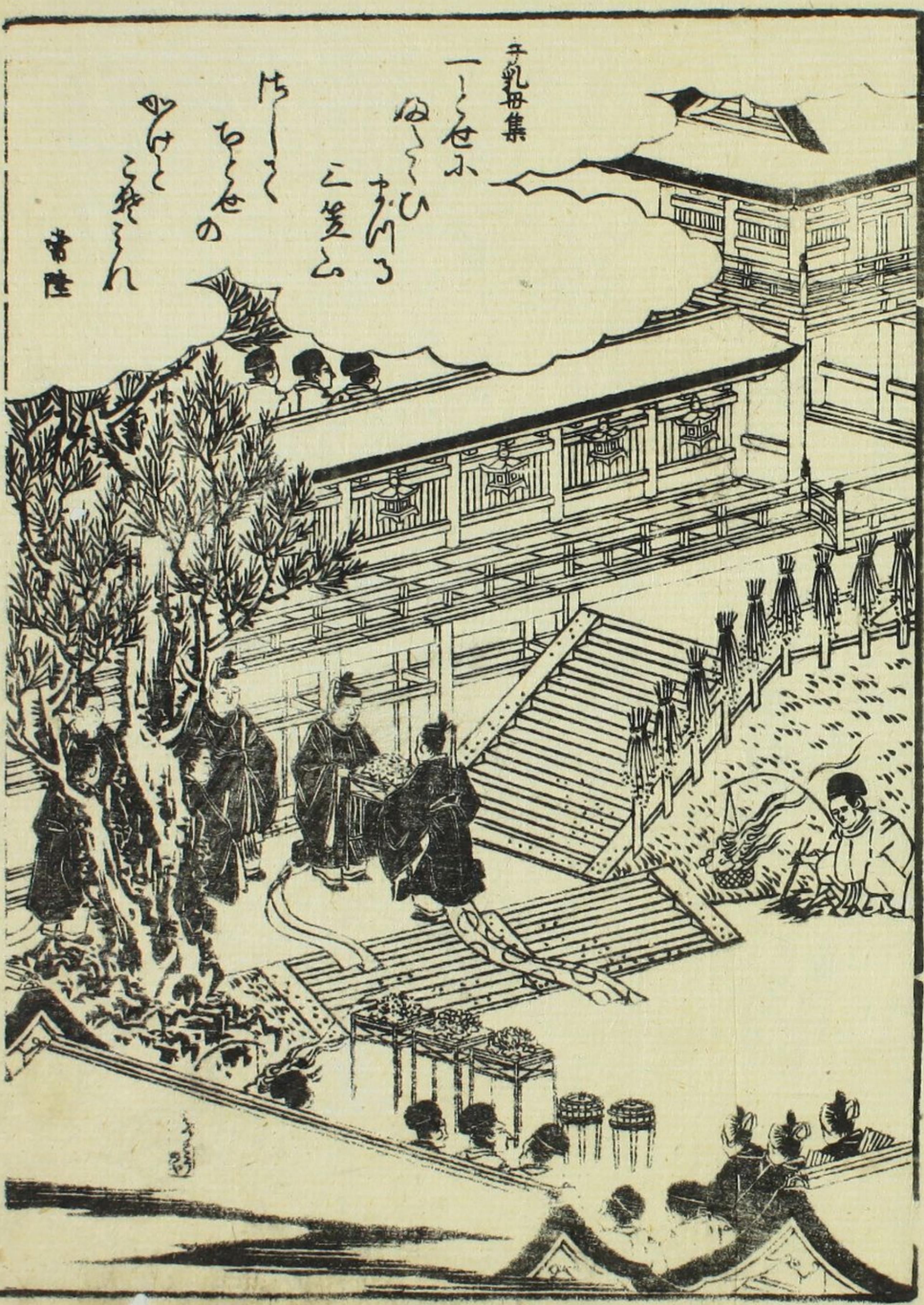
行へ真後清和帝自根

十一月九日

庚午の夜

うれでひよ

うへる





霜月廿六日
御みそ掛ち

稚子

狸

危



大もち古アラタニのを日めと小あり

馬出橋の北の三柱に青竹一束を拂ひておまかせ

林葉シロバナ小いにて けくすをもとへ見ふへりきのま方カタもか

馬出橋アラタニのよりそぐにあ

馬出橋記 み子據平斐アマシタヒの毛狗ウラヌをくねりそじるま日めの原

二基塔ツキタツのむべ馬出橋アラタニの北小わり東塔アマタツ本樹願アマツルモリと字アマシタニて天安アマタス五年深殿アマタシマ大

良房アマラフとの建立アマタツ天平尊アマタス釋迦某師アマタシマ貞觀アマタシマ五年に遣唐使感得アマタシマて末朝の靈

佛アマタツ木梅檀アマタシマの像アマタシマ西塔アマタツ新御願アマタシマと字アマシタニて前僧正覺アマタシマ昭造管アマタシマせられ東塔アマタツ乃

四佛アマタツ同アマタツ銀アマタシマの佛像アマタシマ安坐アマタシマを後アマタシマ文殊アマタシマが化りそて五佛アマタツ共ふ柳子アマタシマ

公坐アマタシマとせられアマタシマ應永十八年アマタシマ一基アマタツの塔アマタツ雷火アマタシマにかゝる灰燼アマタシマとうりとれりと靈佛アマタシマ

あり撰集書

長日郎アマタシマのアマタシマの塔アマタツれわらアマタシマがの塔アマタツがあアマタシマもさうふよ

つらしアマタシマのゆうりわとそとみどアマタシマひうる小無茶玉無れアマタシマくらのねれみアマタシマたるま代アマタシマを

とやゆくアマタシマんえアマタシマ行圖アマタシマよとくうり

若宮アマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

うく芝生アマタシマの森アマタシマがひそひ尾アマタシマをあひとく本アマタシマの系路アマタシマをう道アマタシマをアマタシマあ月アマタシマの

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマのくらはれの系路アマタシマ軒檻アマタシマとアマタシマからうる神殿アマタシマといとアマタシマみ

若宮アマタシマと波瀬アマタシマかアマタシマする毎アマタシマ年アマタシマ十一日アマタシマとしアマタシマ御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

御アマタシマ室アマタシマ小アマタシマ室アマタシマの御殿アマタシマの用アマタシマ本アマタシマ大アマタシマ和國アマタシマより前アマタシマがアマタシマ例

風雅

若宮アマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

まくねアマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

風雅

若宮アマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

まくねアマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

風雅

若宮アマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

まくねアマタシマの御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

華澤アマタシマ御旅アマタシマ前アマタシマ大アマタシマ古アマタシマのむアマタシマふありま日行宮アマタシマとアマタシマく常アマタシマる宮帝アマタシマ

名ニハ列た右もえ間の不ふとやあつより居ノ方の神ノ
枝戸、神祠ハ木立、瀟緹洋比咩あり 宝之祀無所權現

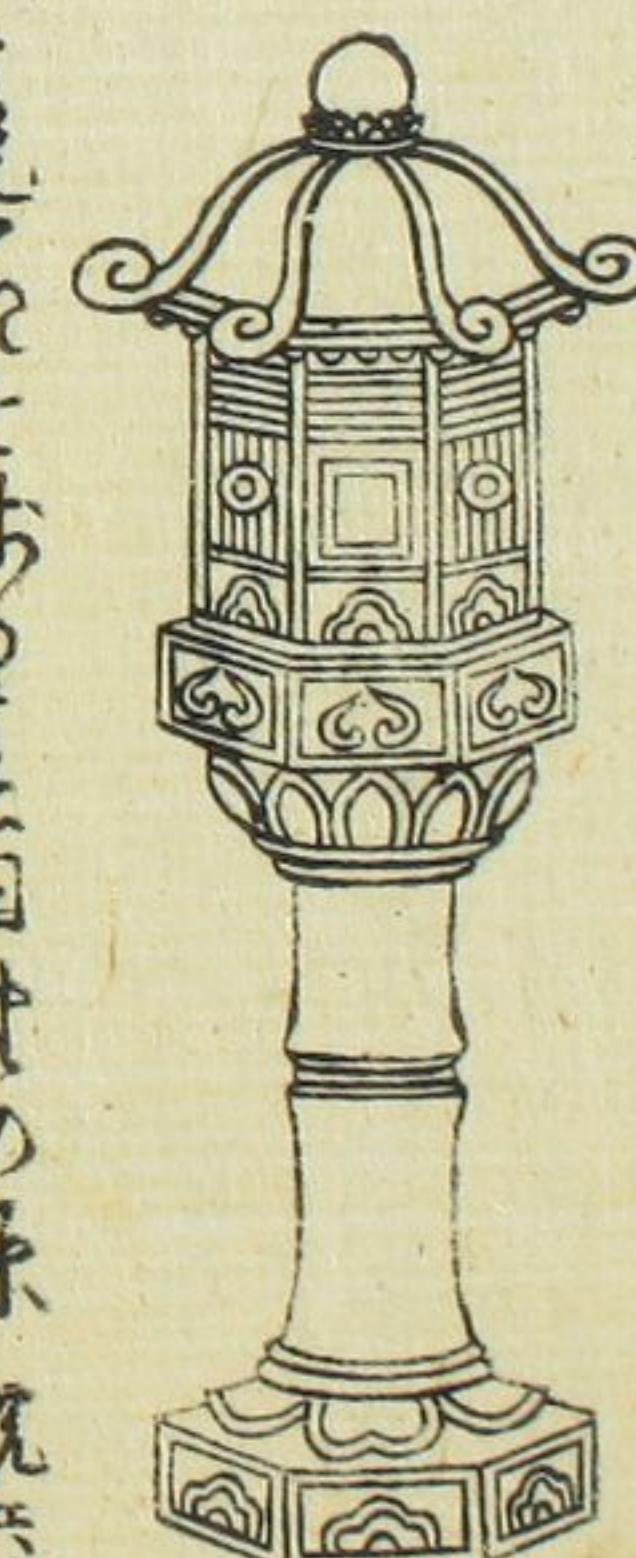
世トク石高一

枝戸神前石燈壇

物高サ六尺一寸五分

神垣參神垣と枝戸の北より

風雅



神垣參神垣と枝戸の北より
神垣の東より左より鹿苑をあると鹿苑をあると日出の東院共清音
正山
手よ振神垣とがこそん日やあ見人ゑれうりうりうりうりうりうりうり
着到殿神垣參右の方があり延喜十六年造立ま日かの勅使にま
計事に詔せし也獄谷じもあり解脫上人の寺は僧那樟解脫上人僧那樟
我大明神の御方便よりひまくへまくへまくへまくへまくへまくへまくへ
あり深音の尼ありも仕方の也獄谷墳をゆま目也のトた也獄谷のゆま
それかわいへ西かわいへ北かわいへ南かわいへ東かわいへ中かわいへ
我も魔道に元ももももももももももももももももももももももももももも
和光金仙の塔塔耳にれくねの樂がまめりぐるわくまくまくわくまくまく
きのくわくまくわくまくわくまくわくまくわくまくわくまくわくまく
枝戸祠へけむり小ありまた月の七日とてする新猿田彦神青御青龍
枝戸祠へけむり小ありまた月の七日とてする新猿田彦神青御青龍

橋へ橋本の前小あり中向道からひの橋へかの宮へ詣するや越道
春日古記
焉龍の橋かと云り一神みがうり花や尻身御佛解脫上人
今

仰のもうかとこ蓋の中向道枝の下枝やうらひの橋

鉢先石神垣參小ありけりやがれ意どとくぬみうばりやくまくまくまくまく
其の名と知れしむり小名の名と詔ありひしもおの邊に名ありくまくまく
利千載元弘三年立后月次の屋内小名目系の儀式ある所を
室永記書名古菩提トテうげくらむる

くみ振神の名とが通り小下枝のほみと階參

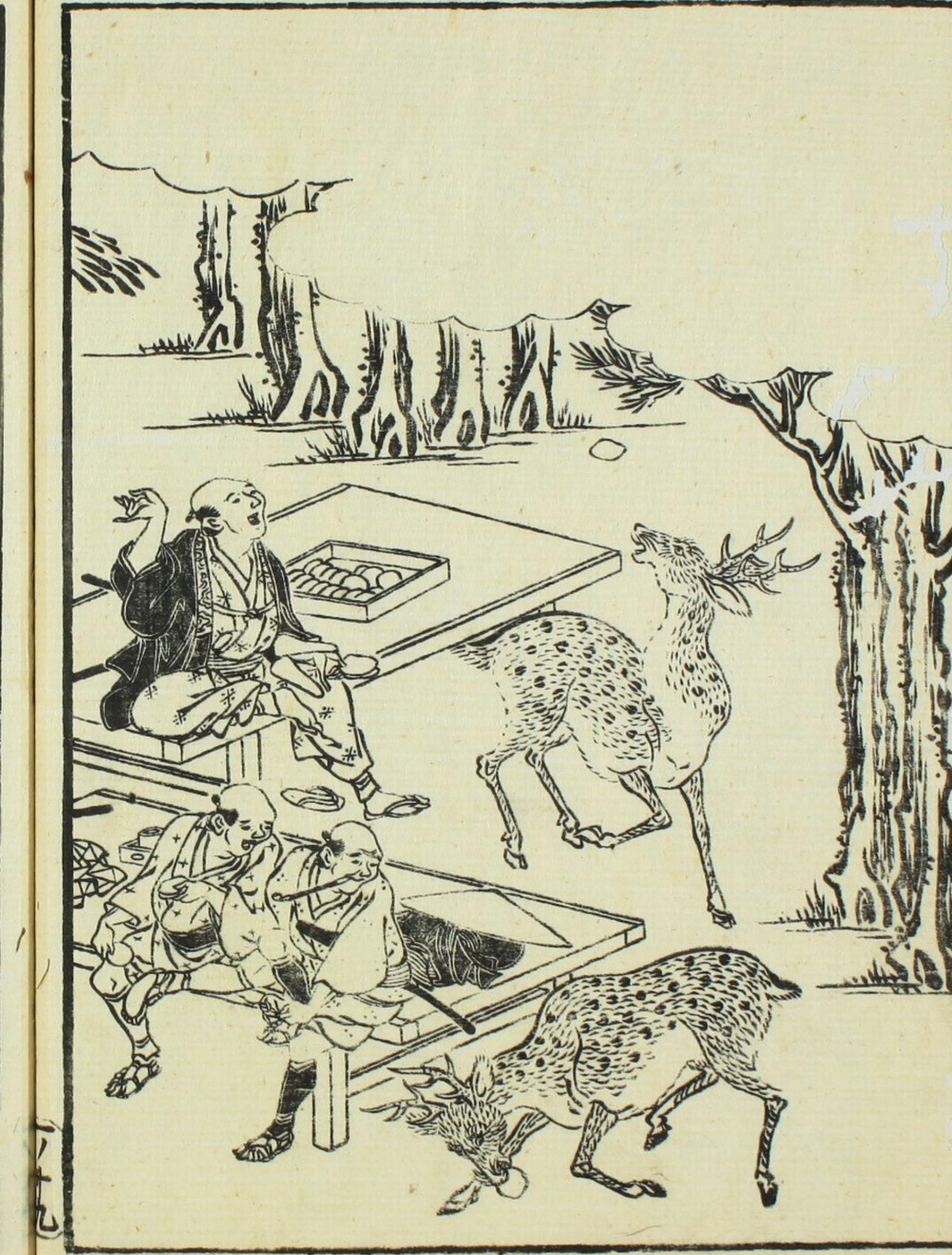
御子洗川社殿廊の東ある細川うきうきうきうきうきうきうきうきうき

内侍門回廊の北れ僧正門回廊の中れ

慶賀門回廊のあれ門がア

外院の小社八座歩廊の外が忠隆入金剛童子祠内門と入北廊小より
樓本祠忠隆のひにあり風神祠木本のあ小より相本祠瑞藏のりふ
令が佐軍祠相本のひにあり栗亭祠は新にあり栗亭祠大醉芥子がある海本祠祠の有
あり大物主今とし田心事ある海本の東小あり
余

雷神祠づれ春日古記にアアアア



借香ナギヤ
下葉集シモガエシと備香スミガエをとテアラ

哥苑

ナギヤの名前ナギヤノメイと
下葉集シモガエシと備香スミガエをとテアラ

本宮嵩

實文紀曰長後ナガヒロの高官タカムカニありにあり極ハシマツに高タカシマま日ヒマツ第一
正月カニツノ社カニツノサ一ノ年イチノニ正月カニツ九日クシマツ初ハシマツニタウムニ高タカシマ同

朝カニツ宮カニツノミコト在カニツ宮山カニツノミコトノ山カニツノミコト入カニツ本宮カニツノミコトの社カニツノミコト水谷カニツノミコト出カニツが

高圓

ニミツの南カニツノミコト

利古今

えの名の跡カニツノミコトの原カニツノミコトとて山カニツノミコトの因カニツノミコトを伏カニツノミコトすり 美玉墓後

後後撰

美玉カニツノミコトや高圓カニツノミコトの松風カニツノミコトとすまた峯カニツノミコトがいほう尼カニツノミコト前カニツノミコト後カニツノミコト院

王華

志カニツノミコトもと山カニツノミコトとて金カニツノミコトを乞カニツノミコトの跡カニツノミコトの林萩カニツノミコトはうりより 後漢城院

後山載

え圓カニツノミコトの跡カニツノミコトは林萩カニツノミコト咲カニツノミコト小たり藤カニツノミコトれ人の社カニツノミコト小カニツノミコトらん 傍カニツノミコト意

彩拾卷

未病カニツノミコトたかひくカニツノミコトの月カニツノミコト秋カニツノミコト月カニツノミコト圓カニツノミコトのと 世人

白毫寺

高圓カニツノミコトと天智帝カニツノミコトの佛カニツノミコト頤カニツノミコトて本尊カニツノミコト阿弥陀佛カニツノミコト是日カニツノミコト化カニツノミコトあり

簡麻鬼堂

の佛像カニツノミコト毘盧空相カニツノミコトの佛化カニツノミコト也藏尊カニツノミコト小跡カニツノミコト皇カニツノミコトの化カニツノミコト西大寺カニツノミコト真正

菩薩

の弟子道照入庵カニツノミコトて一切師父持來カニツノミコトしお納カニツノミコトトカニツノミコトあり

宅主日

太和志日高密鄉カニツノミコト小廢カニツノミコト白毫寺カニツノミコト村カニツノミコト故カニツノミコト小廢カニツノミコト宅カニツノミコト日カニツノミコト社カニツノミコト皆

平岡

小般若カニツノミコトと說カニツノミコト之カニツノミコト一社カニツノミコト法明房カニツノミコト忍骨カニツノミコトがいこうカニツノミコト一宮カニツノミコトとて春夜カニツノミコト神記曰天明作

鳴雷

神社カニツノミコト香カニツノミコト小なり延喜カニツノミコト代宴カニツノミコト高カニツノミコト嶽カニツノミコト巖カニツノミコト之カニツノミコト南カニツノミコト小あり實カニツノミコト入記曰言カニツノミコト人カニツノミコト親王カニツノミコト君カニツノミコト斯カニツノミコトそ

新後拾

名色カニツノミコトのものカニツノミコトの色カニツノミコト小カニツノミコト独カニツノミコトアリ内カニツノミコト岩カニツノミコトつカニツノミコトトカニツノミコト也

香

小石集曰家カニツノミコトと高目カニツノミコト作カニツノミコト鳴雷カニツノミコト神社カニツノミコト香カニツノミコト小なり延喜カニツノミコト代宴カニツノミコト高カニツノミコト嶽カニツノミコト巖カニツノミコト之カニツノミコト南カニツノミコト小あり實カニツノミコト入記曰言カニツノミコト人カニツノミコト親王カニツノミコト君カニツノミコト斯カニツノミコトそ

若冲

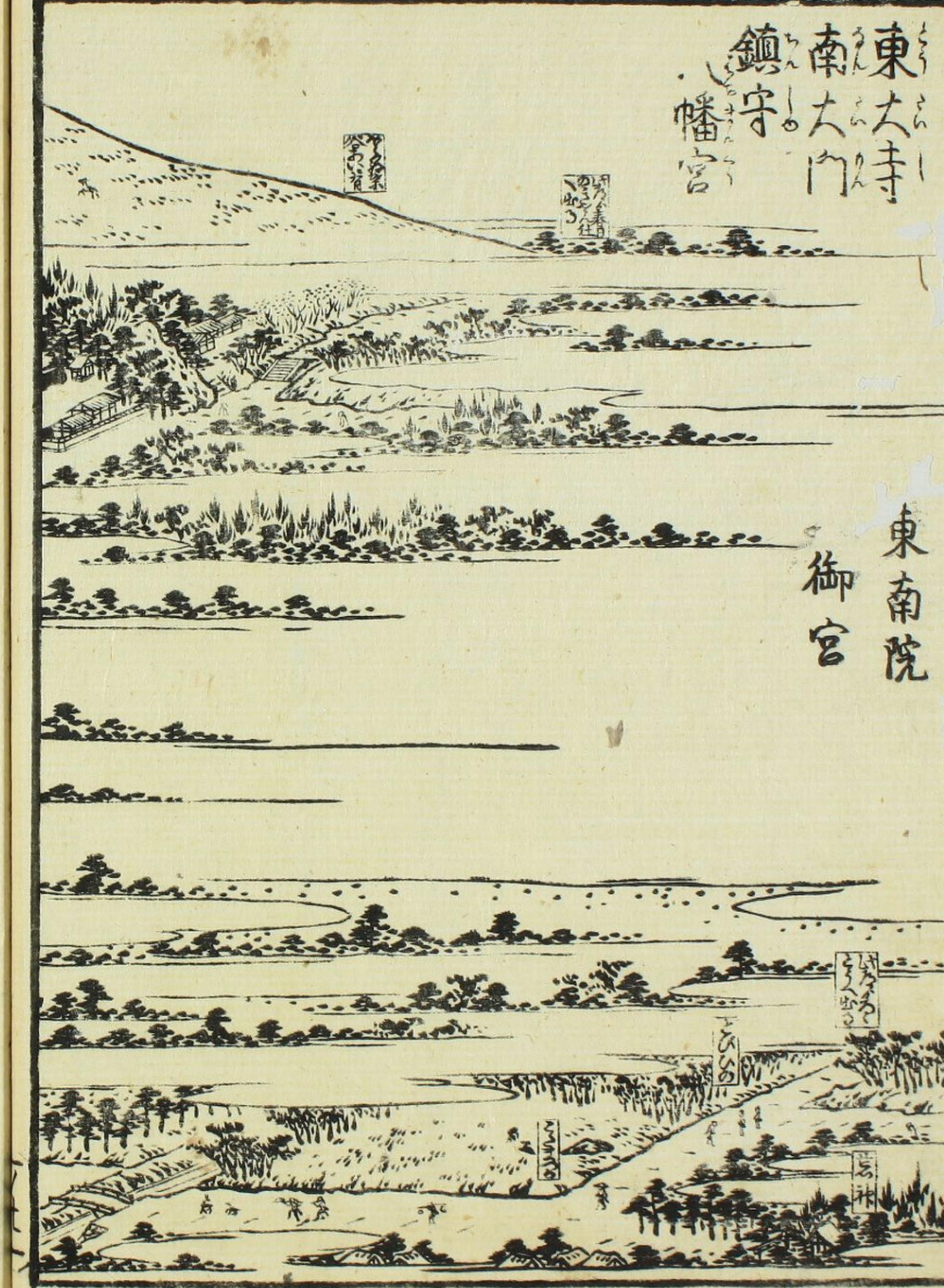
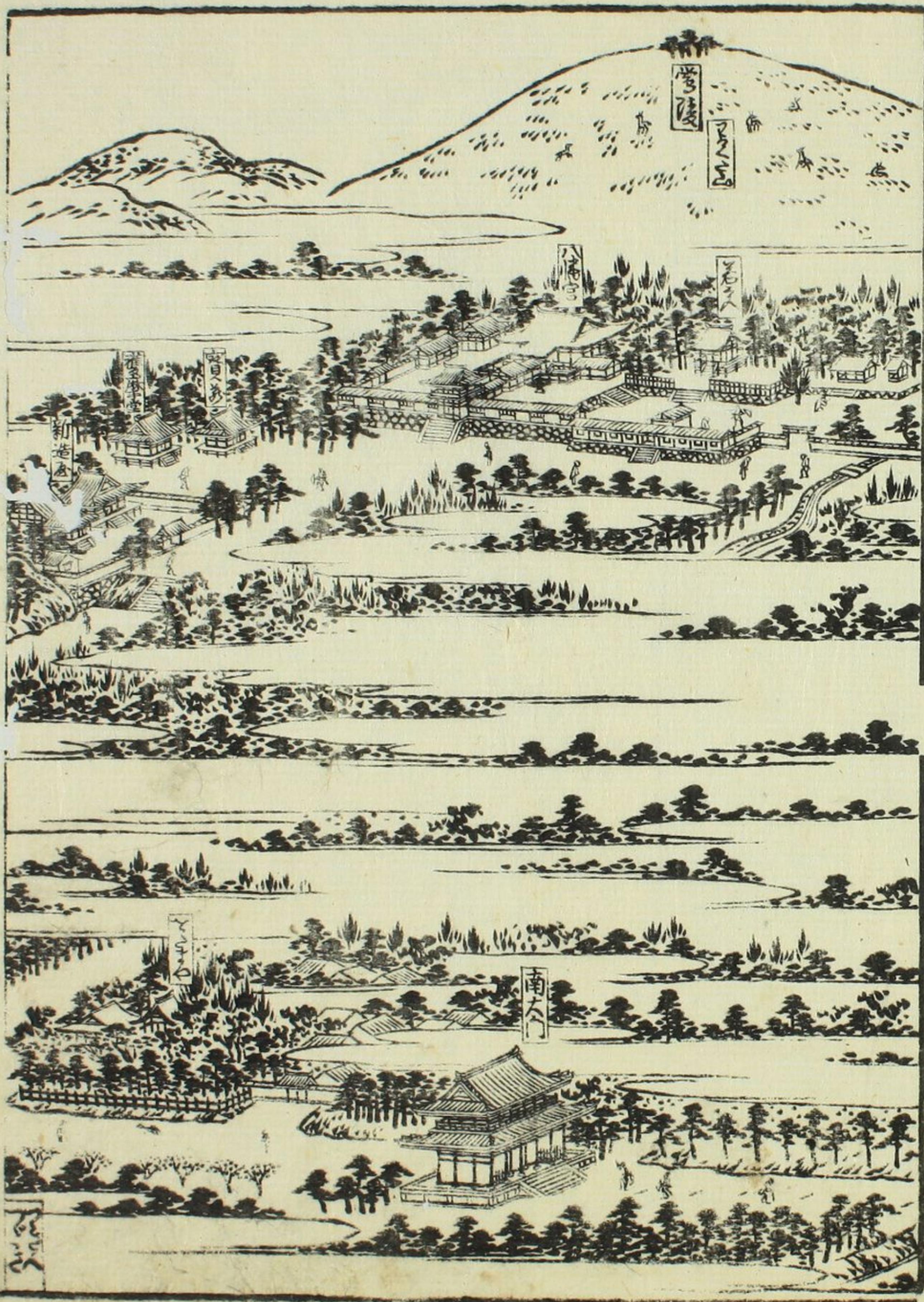
山カニツノミコト二三平カニツノミコトの山カニツノミコトうカニツノミコトひカニツノミコトとカニツノミコト延宝記曰云カニツノミコト人カニツノミコトはカニツノミコトらカニツノミコトとカニツノミコト人カニツノミコト也

天本

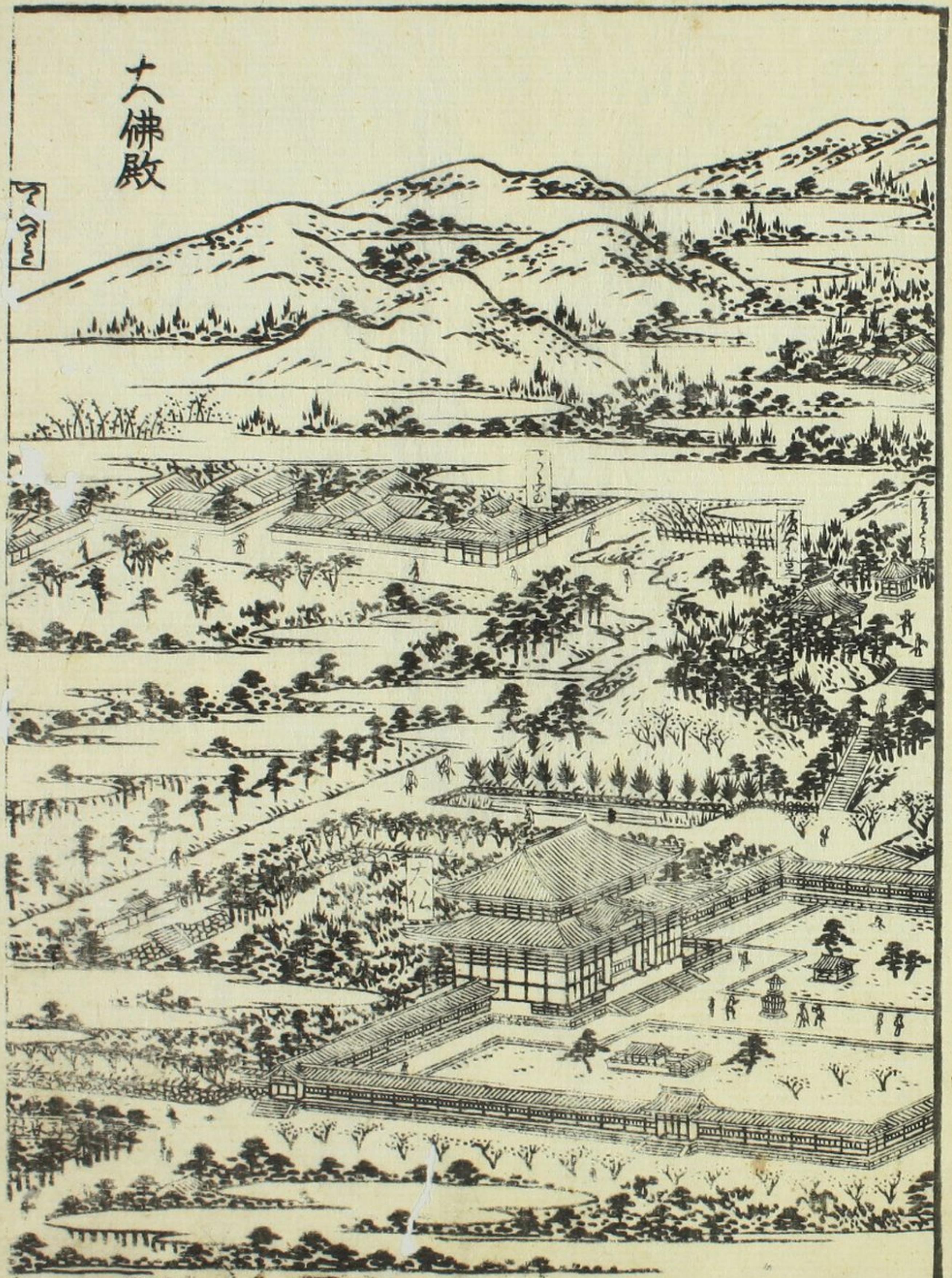
今も從妻カニツノミコトアリねカニツノミコトと日御カニツノミコトの名カニツノミコトをすく 中勢觀

お苑

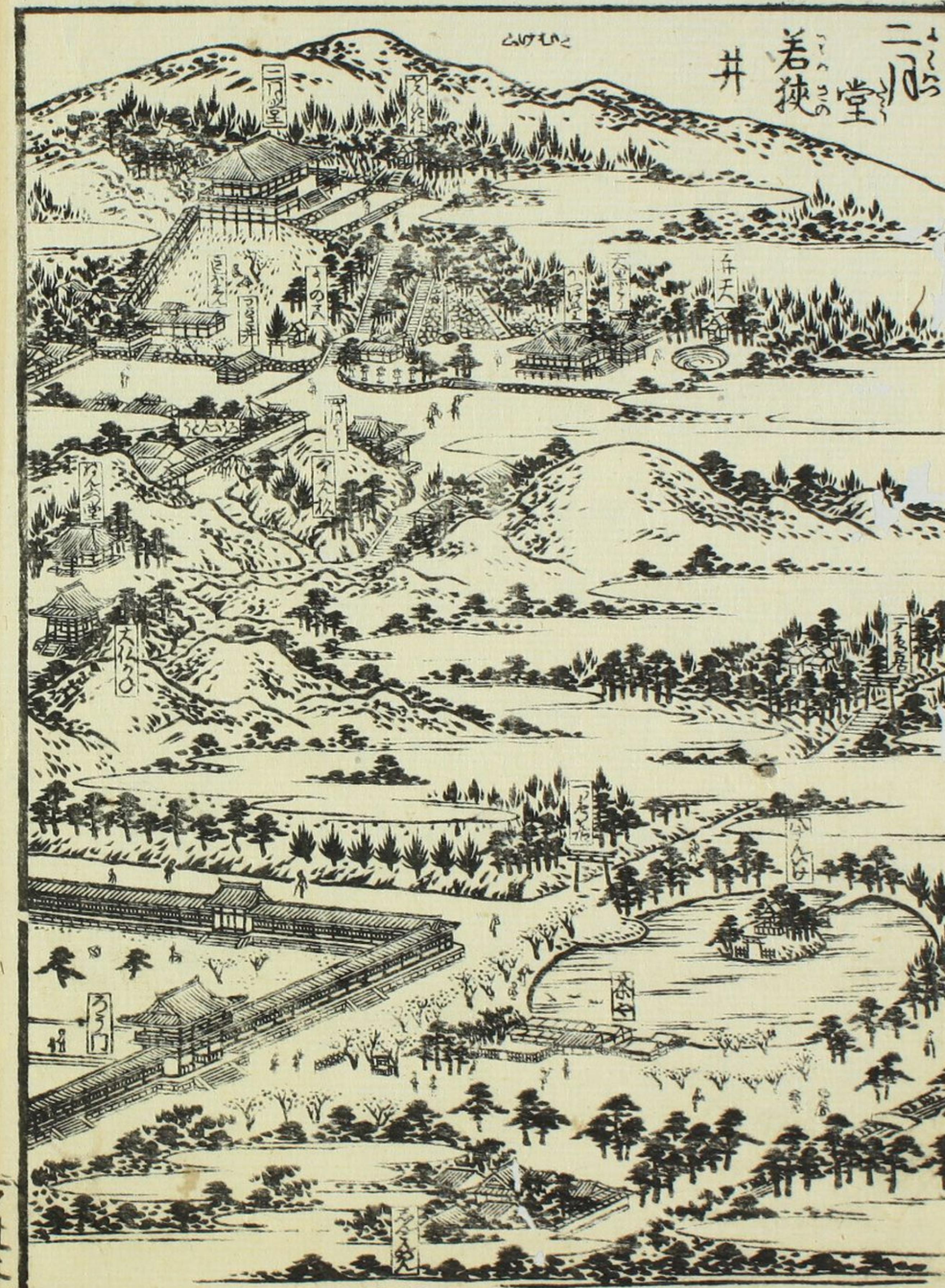
喜日母カニツノミコトの家カニツノミコトと高祖カニツノミコト今朝カニツノミコトの御事カニツノミコト自カニツノミコトとす ね忠



大佛殿



二月堂
若狭の井





東大寺

春日社の小小瀧（一石）華嚴寺又毘諱華嚴寺
金光明四大王護國寺（續日本紀）

佛傳又國說寺又

そん當事すハ聖武天皇の御願（本紀）て天平勝寶（本紀）年中（本紀）小成就（本紀）アリ
宗名（本紀）八宗兼字（本紀）て二論華嚴を法本（本紀）鹿苑杏（本紀）竹小眠（本紀）

勸請金桃（本紀）啄（本紀）之給孤園（本紀）もつる

西大門 平城趾跡考曰東大寺ある門（本紀）去井坂小わり俗に井坂門（本紀）也門額（本紀）弘法大師の像（本紀）て金光明四大王護國之寺（本紀）書

額（本紀）の像に拂天帝秋四大王の像（本紀）て是ハ又耳門額（本紀）也

東大寺穀屋宝藏（本紀）あり門の礎（本紀）井汲の乞（本紀）に付

南大門 額（本紀）弘法大師の像（本紀）一代の濟門主出幸する

南大門 八宗兼字（本紀）と二論華嚴を殊にせり年華嚴にうごきを

あるああ門の額（本紀）

大佛殿

朝野群載曰殿の高さ十五丈六尺東西三十九丈南北十七丈基礎の高さ
十益廻廊柱五百八十本東面八十五間も山百間

（本紀）初天平三年中の造建の大向

本尊盧舍那佛座像

御長五丈戸五寸（續日本紀）鑄具用（續日本紀）鐵銅七千
六十斤白錫一万三千六百三十斤鍊金一万四百三十兩銅五万八千六百九十六石炭一万六千三百

鉢六石（續日本紀）金刀造立の形（續日本紀）朝野群載（續日本紀）小出

押し佛像の盤觴（續日本紀）聖武天皇の御塔依小良兵僧正智行やんの

（本紀）大佛殿の高さ十五丈六尺東西三十九丈南北十七丈基礎の高さ
十益廻廊柱五百八十本東面八十五間も山百間

本尊盧舍那佛座像

御長五丈戸五寸（續日本紀）鑄具用（續日本紀）鐵銅七千
六十斤白錫一万三千六百三十斤鍊金一万四百三十兩銅五万八千六百九十六石炭一万六千三百

鉢六石（續日本紀）金刀造立の形（續日本紀）朝野群載（續日本紀）小出

押し佛像の盤觴（續日本紀）聖武天皇の御塔依小良兵僧正智行やんの

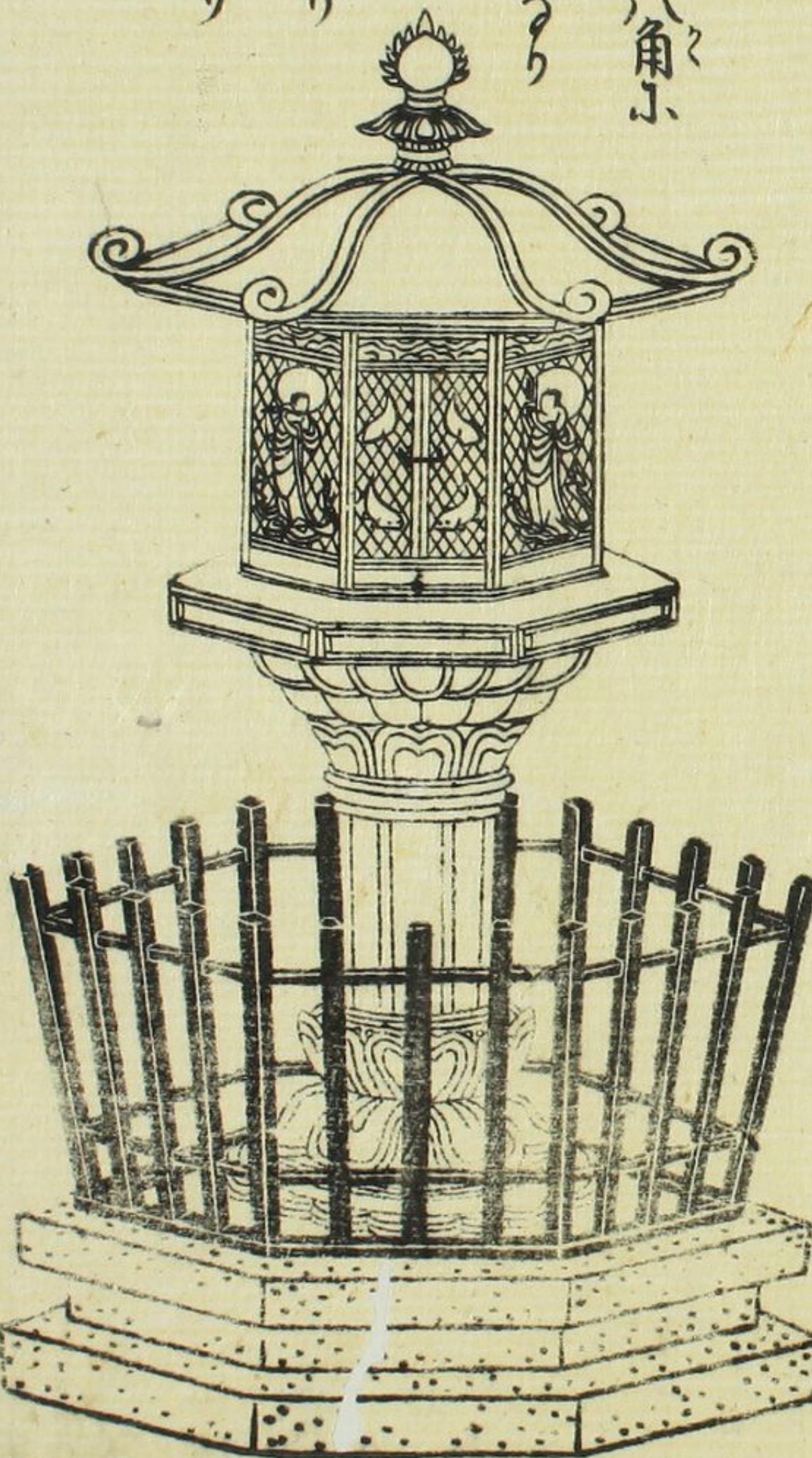
が包み御座ひに染せられ氏の人と同
ゆき御座まつる

卷之三

同十八年十月聖武天皇元正上皇光明皇后金幢（くわんじゆう）寺御幸
大像の供奉あり佛の前後小一万五千七百余の燈明（とうめい）（本起道師）
般羅門僧正兜頬師（くびのきし）、尼基僧正（キノニシ）を遣下（けんげつ）
鑄造（じゅぞう）（朝那）遂（そ）太平勝宝元年十月其功（そのごう）成就（じょうじゅう）と同四年四月上

君
開眼供養あり 律目
本紀 道師・菩提僧正・兜頬師・道濟・律師・達師・隆尊
讀師・延福・慈肉
帝王
編纂

異うるべ
拾卷
靈平の釋迦の佛像を崇めて、真如に至つては、
正基修正
迎見此衛小ども小安^{アヒ}甲斐ありと文殊のよきをみつめ、般舟門



大佛殿前金銅燈爐圖

卷之三

宋陳和卿方八角小
鑄金燈爐
四面之佛像
四面小獸形
銘銅柱小

別記



滑貌言談

万承公菊部のゆゑ
相ちて、三里詫ひ
窪田箸尾の西村
あくまくより故禁
窪田箸尾の元り

相
夕

力氣也

又八舍那の大勝が金剛と云ひてを御金があけられさせりに本朝
御門内金家ふの金剛藏王に御金が得て御室の御室と云ひとせ
て良多傍正勅が家家も丹誠小祀アリテ藏王の御室ありその靈瑞には
近い國能々里にシラタガ老翁石上に祠あり傍正老翁
老翁を比良明神へはれハ觀者之靈也うりと云ひ思ふと
くに又久くじば神徳にはセキセキが経びぬ意滿の像が化り
石山の觀者云れ之缺いくにどく大平九年二月奥列より
寺院を有すり一丈七帝憲感す同四月ニ改元より大平
勝改し 緒日本紀

御佛殿の再建が、佛寺の殿宇は凡て余年が経りて小東寺の
御佛殿は院に慶上人再興の志願が登り勅令が蒙り承勅が勅
と今のが佛殿へ公慶上人へ佛殿再建之記別記にもうれ
大佛の脇士た觀世音 家良法眼技慶京師法橋定量兩化
宇都宮左衛門 極朝綱吉の進
康慶同法眼を慶西化穀倉院 増長天
別當親能寄進 家良法眼技慶化
多門天 定員見化武田 廣圓天
信吉も進 持國天 家慶化小笠原長清寄進右
安永の像も進 佐助士二像四天王
永保に傳ふ今堂内

鮒公の杖の趾 聖武帝の御代に立
て、大金身の種師とせらをもてに杖が
門内に轉じ、八十人立て、杖を立
て、枝葉繁茂す。丈八十尋、嚴徑と
うり其杖中には立
て、枝葉繁茂す。一白櫛木、うり法義の
圓詠に誠と人、其趾あり
平四年に、丈六寸、經九尺、人一寸二分
鐘樓 厚サ八寸用、銅五万一千六百八十斤、白錫二千三百斤、鉛齊、銅載
に立て、
寛文記曰、素の諺小日努は東大寺形へ平等院
聲、震城寺と云
萌菴著侍 東大寺勅封の寶物、信長記云、天正元年、九月三日、信長は蘭菴著侍
使、蒲郡、井伊孫、れい伝長、同廿七年、京に許旨あり、多門に、一寸八分、
鷹日蘭菴著侍、公事、法には、一寸八分、ゆく、其一分、公事、
配給、一丈八分、御前へ國くの大小、外様の付、至るまく
にてト、一場、
死

俊宗堂 儒教僧禪源上人姓紀氏號在馬先棟軒の三男刑部左議司尉出
明利 舍利の瑞光乍見於此而呼加一黑谷原空上人の寺也ふと
さりも後東大寺再建の勧進して自ゆうり嫌禪源上人の杖木殿堂
と堂内小あり堂あたに大鐵釜 俊宗堂の西にあり傳曰俊宗上人丈佛殿
名の系権あり

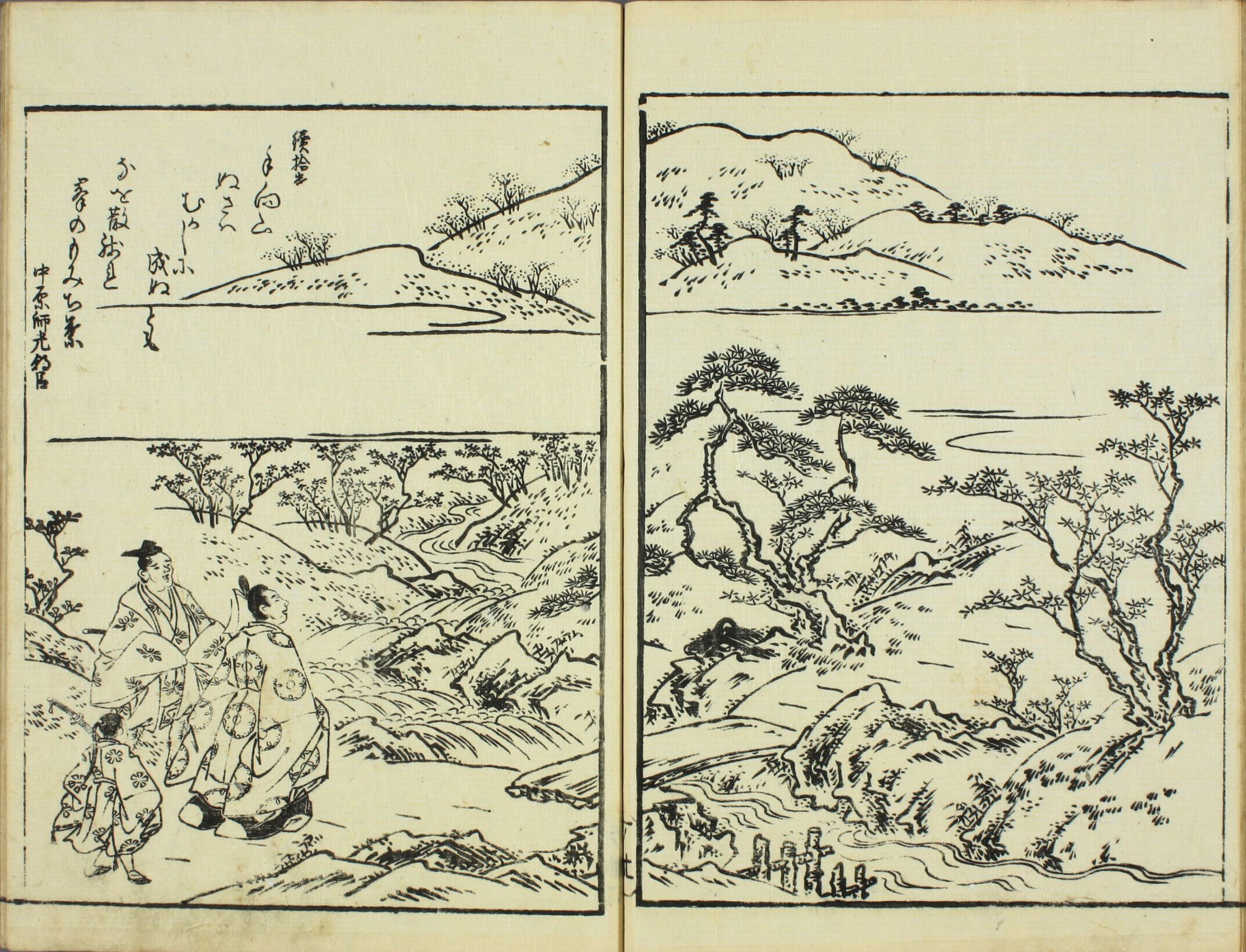
念佛堂 有號也藏菩薩脳内小張歎仰の他亦多有之故是爲國家母と
いふが女のお供うらしく傳を上人にせりへて後院也亦とひつて
良辨松 うるみ毘正幼童の時住於此中也舊に櫟の木すくありしる
多院天永二年小おのげて倒る其れ松生立ちけり俗に之を多
松といふ記載下らるみ修正の辺に國志賀郡の人真毋欽も云ひアモ
男子少く産二女の時母來あがむ小本院に子をとて立けり勿々驚
來りて且子を抱き走去はわざと走り行けども起立將一刃る
うちもふと入ふり母深く懸りりとも其甲斐えふりゆきを頗
あ鄰に義闘僧正といふありまた日め替に詣たまふ小築も一り乃
堅公弄もかづへるや尋ねん因んで跡小井にて逃ちり僧一正
かづく四捨ひそりて育らとし五歳とて、今經福が足らむ小



良辨僧正初のとく
令麁う仙人といひ
孰金剛神の像が
左きくとくへ真殿
經分漢通波側か
石ふよりく王城へ
向ひく金剛聖王
天長地久と喟へ
其聲遍小殿聞小
達一室玄室不
儻（皇居を思ひ
天皇陛下あひゆ
勅使が遣され
令麁う仙人といひ
やれ移ひける

一が圓三十と御りまつりは相小入まめ嚴の奥有が深ひ聖武帝
の御依僧とあり東大寺大佛殿をとむるの勧じよトテモ王平
宝字四年小僧正とあり寶龜四年十一月十六日入寂トモトモ
鈔のはくみびんが舟の日とゆきのくらひこぬとい哉
と書系分入御りくる海公狀書の所にはとて御す
の弓の小も夜の孤村の辻つじふと御かる
一舉の糧とよし、と日の今のうれりの身みそをありてあきのよ
さくとくに二十年ぞとゆくひけりんと老驥のふ里むさとがなづくとも
されへ飢鷹うしおの一呼ごとすにたゞやくやありくお放御ほにゆくよ
えく淀舟よしにある者もの國くにあらわしホトトギス
にひけりゆたまくのうみみ僧正そうの帝てうの拂は拂は依よ琴ことく世よのよそとんとん
たやくよくわりけは止と推し正せう雅まさくは鶴つるの瓶びんを拾あつく
ありとぞ詰つりけり余よ新しんふざくすくらもそと海うみ花はなくらむ

まくらの床小室より我のうなみ傍正などを至る僧正舟ひトスを當
とづくへ化すとくはく終に母とふもうちだましれぬじが多世の事と
経の社と大佛殿のものとてあり
二月堂の羅索院と号す太平勝宝四年良秀僧正の拂寺と云實忠和尚
勅定小堂にて造営あり本寺之御事を移別號波浦より十一面大悲の像長
七寸の洞像にてあくまでその脇のや 實忠是と感得 當院小
安室寺とし毎年二月節より十日まで法會あり十五日より後堂入
於く涅槃金あり又入院の日左國中靈験の尊像であると申
に二月堂の觀音と肉身とせかしきと大觀音と實忠和尚補陀洛等方
觀音が効清れてゐりて誠悔の法が行ひいとく一併法行通記小刀にて
當堂は法事の兵火に俄小刀からくりありとく又寛文七年二月の圓融、
瑞光、般若の法事とく又小刀で巨木からくして像のあくらく除毛とりて聖武帝、
源の涅槃經光明石の華嚴經牛王の印額なども少く存する當堂へ
達の名もあらん
若狭井二月堂の開伽もあらぬ基實忠和尚二月堂の行持初夜



續拾
む向と
ぬまへ
ひづへ小
成ね
ふと散歩と
きのりみち景

中原京師光経

諸神の名帳が漢供せしゆく小岩桜國遠古明神今も有レ、七預
金の御加護を宣へ不うり黑白の持一羽生中より祀たる其
御水と流下り一本旱して廟加護す。荒傍井の下より小
集うて枝の下小向ひて行はとて下りて中におゑ置けり毎寒月
十日一夜附着桜遠古の神おみづの源を汲く者か
故小高毎川を名はれ給はれ得病の體をあらむと飲ま
井の水あり二月堂の北の祠を遠古明神二月齋二月堂の始離場
南の祠と飲食の神二月堂に在り

み取や筆の僧才背乃考

法義堂ハ俗小月堂といふ金鐘寺釋書金孰寺順金
天平九年良無僧正の因基あり奉多不空絹索觀音一尊毎の化
東小不動三尊小地藏菩薩共小光明院の佛也大師の近徳也
三昧堂俗稱二月堂といふ二月堂二月堂後此の名はけ
りけるやや考究者皆菩薩又十一面觀音不動の主毘沙門大之

鎮守八幡宮ハ天平勝室五年十二月小糸原京宮小糸宮と作り神宮
又大佛殿のやうり小門一基うち擴倉最明寺殿の下ふるて二月堂
の南小遷す。利髮塔收一石塔

講堂の隣の大佛殿の後ある礎石あり初天平勝室年中の造建也

左尊ハ力大の子の觀音一万僧令の供養ありて大人の胸さうりて
ゆき異色もひきゆき水縁の圓縁より威く一礎の遺なり
ゆ向て俗小幡本尊の御前流のうなぎをかぶつた拂拂納言兼武藏守良安安世卿の古墳あり成

後後撰

わ榮としむれどもとての向の御神やあるもん 異文

武藏守良安の拂拂拂拂の拂拂ナシテ御前流の拂拂也正義也あくまでもとての拂拂也

後後撰

しき一物をもとての拂拂也正義也あくまでもとての拂拂也

古今皆はいは業おねむ二重の右からとての拂拂也正義也

后のふるせられ一あ

業平抄は二条の后か

ゆきみく平の原うり

あしの放京へり

さりけの後小ゆせと

基經合國經大納

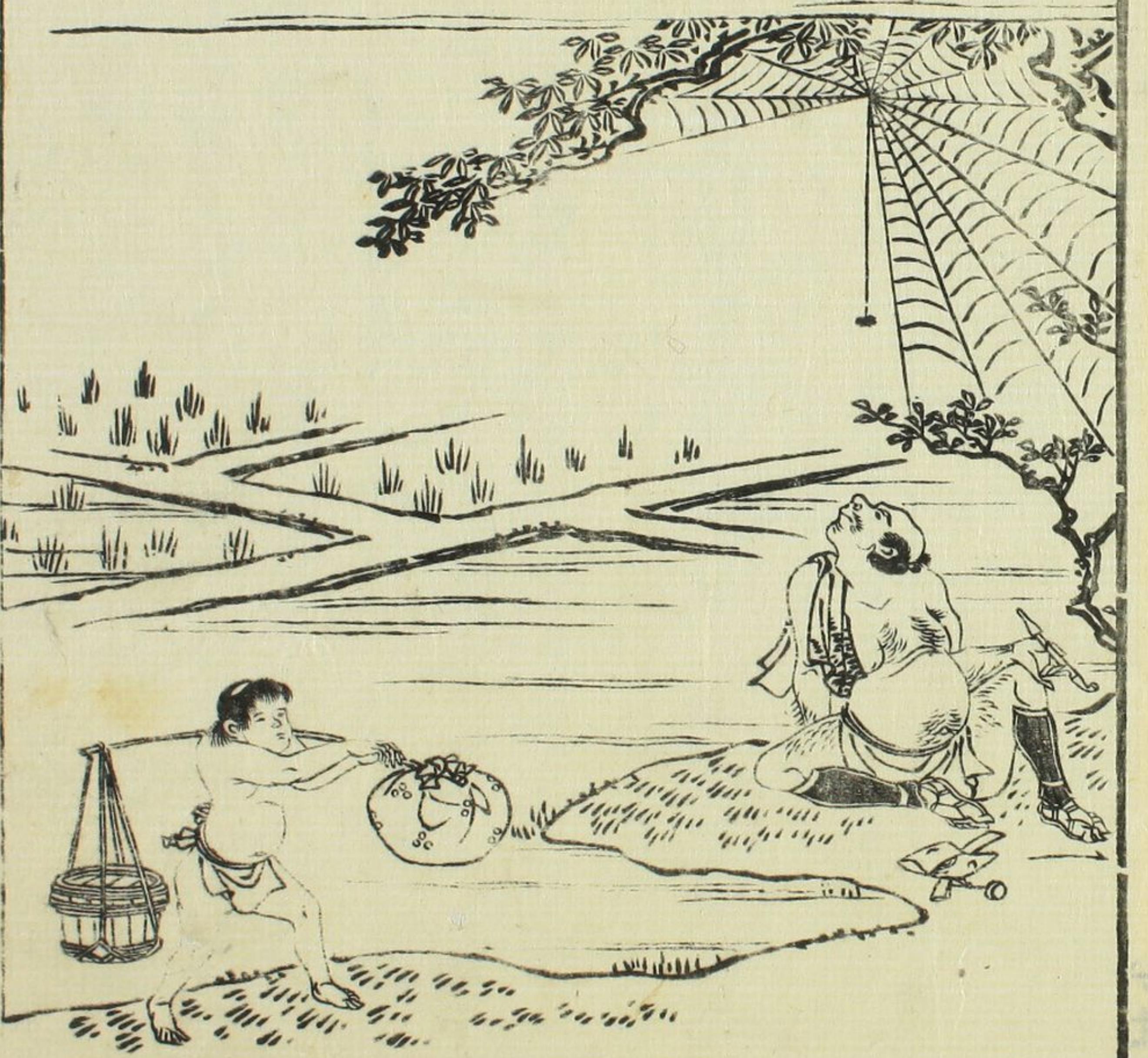
はのがよしてとり

ゆきよとくとタ

くのくくがゆ



吉原光後
月山の志
古川の水
成り立つ
山此をも
神もひそ
かく代と
暮きよ



新封倉へ東大寺の寶藏へ二庫と/orノ和漢の寶器から、中ふ名を
二種あり一種は蘭奢待と號と聖武帝の御時異國より房り一名者
將軍家天下を創の時當事公候造しきるがゆ一ノ切符と例定利尊氏は
一ノ切符と織田信長に一ノ分切りと勅使と日跡大納言資定卿危を舟
大納言雅教卿とぞ守一ノ慶長七年六月十一日と/orが切りと勅使、勸修殿
唐橋殿柳原殿とぞいと付名をかく切名とよふ幸のゆくに成るる減でばと
少一様子の紅塵とあア又勝毛屋門と/orあり東大寺は院の時唐士
きりぬりと/orと金匱風と當事アノ法華寺と/or其間十五町光明皇后拂
糸経の附た右小さくに仏子縫りと/orと神武帝と/or孝謙帝小
至ゆるく代主下信の表一袖あり其外記と/or小隊限か
至武と/or廿五所とどもアハ治承年中大佛殿再建の時精進殿の通廿五人わら
き武と/or廿五所とどもアハ成教の後半とふ入サカモ薩と化くとせり入ふより放小名
坊内に遺跡あり院の空海ちうらが俗小地藏と/or
劍塚取と/or東大寺の時阿彌陀佛と櫻井と/or奉圓院と/or并田が
萬葉

戒壇院

聖武帝の時
鑑真和尚

來朝して乃笠那蘭陀寺の主がお文遣也藏也
走り築きて戒壇

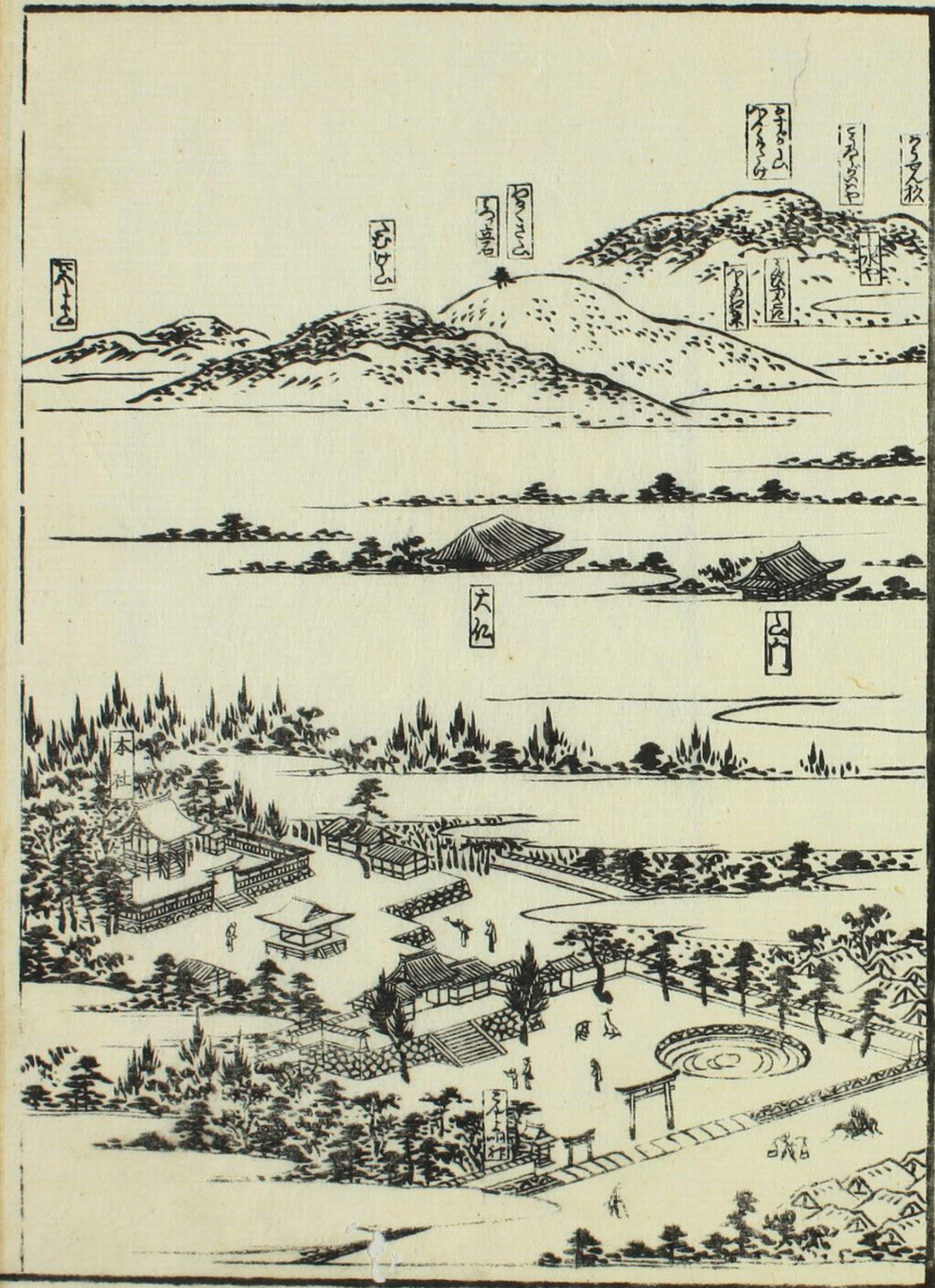
宜寸川ス古城川宜寸川と/orが御園を置きより并田が
万葉

そんじ子小夜僧房の宜寸川と/oもあくねりいしり用ひ刀ん
浮云祠延宝記曰は佛神公麻岐山神向わり一旅の初らと麻岐山神向
りと脚立井が大師の御所セのく井と庵と比向荒神延宝記曰本也ハ明星あり
大御所のうと/or廟の足ある石あり

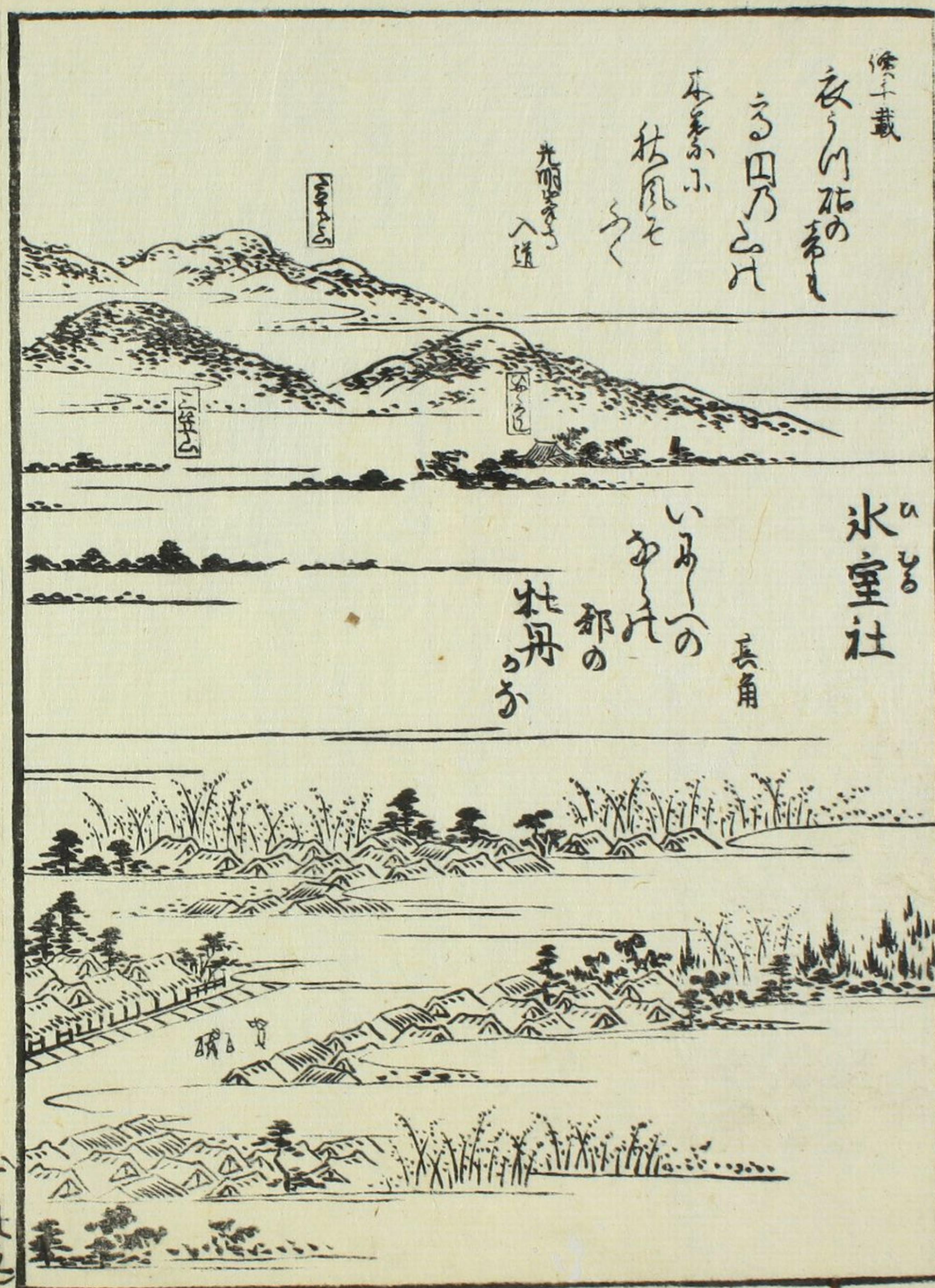
真言院弘法大师の造立りと則大師のそ像ありと藏菩薩と/or小併
智皇の化と若無畏ニ藏の佐野と脚立井あり若無畏天皇のくと/or老年ゆ
護法若神守護小立かと足の石あり

東南院聖寶尊師の建立と荒廢小立かと龍船院と慶土人再建
わりては嚴徳義と龕と沱宣拂在院小あり神龕景を二年出流れてと社の
冰室社實文鏡曰比向荒神トアリ小ありとある所と社中ヘに德天皇左右門
小春日の伶人奉坐が奏ひ水室の

舊址上ミ小立



一一五



氷室社

後半載

古今　まことに　よきものなり

10

野守は山中をさざなとて訪ねり。小まやから清水あり。かく
かくも清々として、もひく雄鷹を皇帝梓とみひけ。かくもひくよ
かくもひく。而鷹それ。又其時其時此ちふるやくに向ひて。而鷹のあり所と見る。かく
かくして。かくに若ふる掌とて。かくがゆく。かくをとて。かくせむ。かくひく。かくは事小
わらわ小鳥の氣れ。かくはとて。奏へ。かくと。奉よられよ。かく

輶
輶磧門 東本ち西北の物門とて俗小景清門
一月大佛供奉の日あそ七日清原清け門に陣とお軍頼朝とて竊く扶父重忠
耶と金相分察して京清が捕下ひ是俗說妄該あり京清へ建ぐら年
一月兼倉主牢に於く花と供奉の日眾徒棍石景時と立小狼藉の祠を
發はれ將軍の嚴令小より少く朝光口難とて衆徒と歎め難牆
かくむ和田氏盛梶原景時武者折して隨兵を率ひ門を出むと
俗系出と號く京清と称ドク

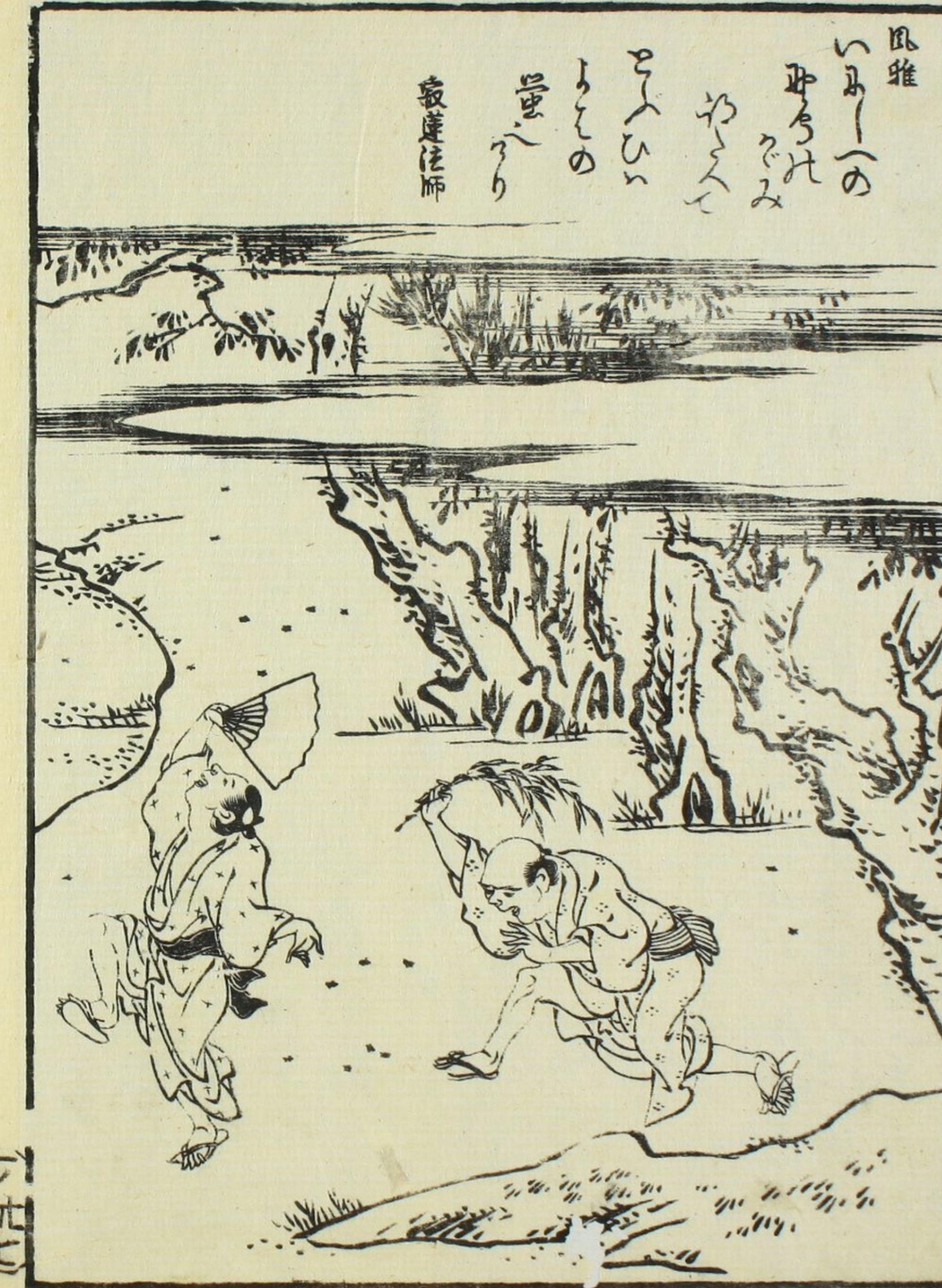
風雅

いみーの
ゆうれ
やくみ

よのの
やくひ
やく

量
あり
おもの

豪達法師



下居

あいを産

死火の
せ

見よ
ゆく

玄裡



立百神社 東大直真言院の北にあり延喜式出

飯盛山おやせさん 貢々龜元年西大直東塔の心様の碑石碑がてん碑

蝙蝠窟ひつばくくつ

喜日と小わら富出の跡こひじゆ こ六七す

大和名所圖會卷之一

終

ノル八

四書集注

道春点
竹林堂

全十冊

古文四書集注類板多レト雖此集注四書一板ハ諸儒先生ノ校訂ヲ
經テ諸家ノ訓点ヲ參校シワツラシキ假名附ノ則リ平上去入之聲ヲ
正シ字音ノ義理ヲクワシフシ上本ノ謬誤ヲアラタメ集注、趣意ニ隨
ウテ捨假名ヲホドコシ速カニ讀ヤスカラシム初学ノトモカラ必ラ
此卷ニヨワテ学ブトキハ大ニ益アルベシ

攝

生

談

泉堺近藤隆昌先生著

全二冊

比書と書生と追ひのちにてすら當時女優の人氣ひとき ト
あー安き生の仕方うみやう へ飲食の若處わざか て
ちー延命長寿の道ちよめいじょうじゅ ものをも

浪華書肆

心齋萬通

止久太郎印

河内屋喜兵衛

